

# 英語

## ——一橋英語百年の歩み——

山川 喜久男

### はしがき

いま、一橋大学において創立以来百年間に、外国語科目としての英語が教授され研究されてきた道程を顧みるとき、それが、一橋大学の標榜する学問と教育が実学としての商業教育に端を発し、次第に学術的体系を備えた総合的社会科学の研究と教育に進化発展したという歴史的経過をかなりの程度に象徴しているように思われる。日本が文明開化の具として英語を学び始め、次第に英語の学習と教育が、その実用的目的に加えて、知的精神的教養の陶冶という文化的意義をもつものと認識され出し、ついには言語としての英語や人文科目の一分野としての英米文学それ自体を目的とする研究態度が重視されるようになる。これが明治の初年のころから現代までの約百年間に、日本の英学界が歩み進んだ道である。実に、一橋の英語の歩んだ道は一橋の学問全体が発達し来たった道程を象徴していると同時に、日本の英学百年の歴史の縮図でもあると思われる。

一橋の英語の歴史をこのような視点に捉えるとき、それをつぎの四期に分けることが適切のように思われる。第一期は、明治八年に商法講習所が開設され、商業教育の手段として英語が学ばれ、事実上英語を通して商業教育が行なわれ始めた時期から、明治二五年、高等商業学校に昇格した本学が官制の商業教育機関としての基礎固めが完成した時期に至る。第二期は、明治二六年学制が改正され、それまで東京帝国大学文科大学教授であった神田乃武が本学教授として赴任し、英語科の陣容がひととき強固なものに整備され出した時期に始まり、東京高等商業学校の学術的な商業経済学の高等教育機関としての地位が世に認められ、大学昇格の機が熟した大正八年に至る時期である。この第二期には、学外にも、英語会の目覚ましい活躍などにより、真に一橋英語の声価を高めている。第三期は、東京商科大学に昇格した大正九年に始まり、新制度化される年の前年、昭和二三年に至る時期で、神田教授の遺薫のもとに、卓抜した語学的実力を備え、あるいは本格的な学者としての英米文学研究者が英語教官として相次いで就任し、英語科の陣容が一段と強化振興された時期である。この第三期において高度の実用を主旨とする英語と総合的社会科学の一環としての、あるいはそれとの接点をなす人文科学としての英米文学が一橋学風の一環として結実されたといえる。第四期は、新制度による一橋大学が発足した昭和二四年から創立百周年を記念した昭和五〇年に至る時期であり、英語教官としては東大英文科出身で、英米文学や英語学を専攻したものの全体の中に占める割合が一段と増加し、むしろ語学的実力者を主体とする伝統的特色に上まわって、英米文学・英語学を専門とする学究的雰囲気が増強されるようになっていく。同時にこの第四期では、学科体制として、英語の占めるドイツ語・フランス語・ロシア語・中国語等との対等な外国語科目としての位置付けが顕在化され、語学教官が研究と教育を一体化した主体的立場を希求し続けて、今日に至っている。

本稿は、以上の四期にわたって、本学における英語が教育され研究され来たった百年間の歩みを、その担え手である各時代の英語担当教官の叙述を軸として、辿ってみようと試みたものである。歴史的記述である以上、当然なこととして、事実を伝える資料に準拠すべきことが要件となり、参考にしうる限りの記録上の資料によつたが、そのほか、本学出身の方々や、かつて本学で教授として在職しておられた先輩諸氏の提供された情報によつるところが多かった。本文中にそれらの箇所には、その都度出拠を明記しておいたが、ここに、特に参考にすることが多かった文献と、情報を提供して下さった方々の芳名をあげて、感謝の意を表したい。

主な参考文献

本学人事課・庶務課および学務課所蔵書類

『一橋大学年譜Ⅰ』（一橋大学、昭和五十一年）

『一橋五〇年史』（東京商科大学一橋会、大正一四年）

『一橋大学創立七五周年記念論集』（一橋学会、昭和二五年）

『一橋専門部教員養成所史』（史編纂委員会、昭和二六年）

『如水会会報』（大正九年八月創刊、如水会発行月刊）

『英語青年』（明治三十一年四月一五日創刊、初め月一回、二回、三回または毎週刊行、第一五卷一号（明治三十九年四月一日号）から月二回刊行、第八九卷七号（昭和一八年七月号）以降月刊。発行所初めジャパン・タイムス社、第六卷七号（明治三四年一月二日号）から英語青年社、第九〇卷五号（昭和一九年五月号）以降研究社）

『日本の英学一〇〇年』四卷（研究社、昭和四二〜四四年）

『商法講習所』（手塚竜磨編、東京都都政史料館、昭和三五年）

Memorials of Naibu Kanda（神田記念委員会編、刀江書院、昭和二年）

『長岡教授の面影』（長岡記念事業委員会編、三省堂、昭和七年）

情報提供者芳名

会津洋氏（本学元教授会津常治氏のご令息）ムメ・プリンクリー様（本学元講師ジョン・プリンクリー氏未亡人）出来成訓氏（宇都宮大学助教授）府川あや様（本学元教授府川哲雄氏未亡人）市原昌三郎氏（昭和二六年学部卒）井上胤吉氏（大正八年本科同一〇年専攻部卒）同妙子夫人（本学元教授長岡擴氏のご息女）入江勇起男氏（大妻女子大学教授）磯野修氏（昭和一八年学部卒）菅順一氏（昭和二二年学部卒）木村重義氏（本学元教授木村重治氏のご令息）木下光雄氏（昭和六年教員養成所同九年学部卒）喜多了祐氏（昭和一九年学部卒）喜代田薫氏（本学元講師チャールズ・アーネル氏のご令息）小島義郎氏（早稲田大学教授）古瀬良則氏（本学元名誉教授）倉橋俊一氏（錦城学園高等学校校長）皆川洸氏（昭和一八年九月学部卒）水谷九二吉氏、他泰山会会員諸氏（大正三年本科卒）宮田幸一氏（鶴見大学名誉教授）村松恒一郎氏（本学名誉教授、大正八年本科同一〇年専攻部卒）内藤信介氏（本学元教授内藤三介氏のご令息）中村為治氏（本学元教授）西川正身氏（本学元教授）大川政三氏（昭和一七年専門部同二三年学部卒）大村喜吉氏（埼玉大学教授）菅原藤也氏（昭和二二年学部卒）須藤斎治氏（大正六年本科卒）鈴木秀勇氏（昭和一八年学部卒）高梨健吉氏（慶応大学教授）手塚竜麿氏（元東京都政史料館長）渡辺均氏（昭和八年専門部同一年本科卒）渡部正行氏（本学元教授渡部行三氏のご令息）山田和男氏（本学名誉教授）横山健之輔氏（昭和一六年学部卒）米本健一氏（本学元教授米本新次氏のご令息）吉永栄助氏（本学名誉教授、昭和一〇年学部卒）

なお、当初から草稿上の指針と下準備をしてくださった学問史編集委員の中村喜和氏と学制史専門委員の宮野悦義氏、現代編の資料整備にご協力くださった英語担当教官各位、人事資料の調整にご協力願えた人事課の川杉光司氏、および特に第一・二・三期に関する資料作成にご尽力くださった学園史編集委員の大島栄子さんには、心からの感謝の辞を捧げたい。

しかし、以上のような文献や各位から賜わったご協力にもかかわらず、なお各教官の履歴・業績・授業情況などにつき不明のままに記せなかった点が少なくなかった。この機会に、それらにつきご存知の向きからのご教示

を願えれば幸いである。また、思わぬ誤記誤報についても、読者の忌憚のないご注意を乞うものである。

## 一 第一期（明治八年～同二五年）

### 一、商法講習所（明治八年～同十六年）での英語

明治八年九月二四日、銀座尾張町二丁目二三番地に開設され、翌明治九年五月一日に京橋区木挽町一〇丁目に移転した商法講習所は当時アメリカ駐在代理公使で帰朝している森有礼ありが招聘した米国人W・C・ホイットニーを指導講師とし、矢野二郎を所長として、教育業務が行なわれたものである。

語

矢野二郎（一八四五～一九〇六）は江戸駒込の幕臣の家に生まれた。一五歳の折に幕府の英語翻訳官森山多吉郎について英語を学び、一八歳の時に使節随員の訳官として渡欧し、その後外務省二等書記官とし、さらには臨時代理公使として米國ワシントンにあって要務に当たったという経歴の持ち主であり、実務的な英語の堪能家であった。明治九年五月二六日、実業教育樹立の意義を認め、この「前途暗黒、多勞少酬」の商法講習所所長としての任を受諾した。<sup>(1)</sup> 思うに、この建学の祖矢野二郎こそ、実学としての英語修得という一橋英語の始原的特徴を体現した人であった。

英

つぎに、W・C・ホイットニー(William Cogswell Whitney)（一八二五～一八八二）は、米國エール大学出身の数学者であったが、語学に堪能で五箇国語に通じていた(言語学者のWilliam Dwight Whitney（一八二七～一八九四）はそのいとこに当たる)。エール大学卒業後ニュージャージー州のニューアークに実業学校 Bryant, Stratton & Whitney Business College を創設し、その校長を務めた。ホイットニーが日本の商法講習所で行

なった教授法は上記のアメリカでの実業学校で採用した方式によったものであり、共同経営者だったブライアントおよびストラットンとの共著 *Commercial School Book Keeping* (『商業簿記法』) と *Practical Business Arithmetic* (『商業算術法』) を中心的な教科書とした本格的な授業であった。<sup>(2)</sup> 商法講習所においてわが国での最初の米国式簿記が本国の専門家によって正式に教授されたわけである。しかも、その授業はすべて英語によって行なわれたのであり、生徒は在学期間中終始商業教育の媒体としての英語に習熟させられた。

就業年限は初め一八箇月であったが、明治九年一〇月には講理科一年、実践科一年の二箇年と改まり、さらに明治一四年四月には、就学年令も以前の二五歳以上が満一三歳以上と変更され、五年一〇期の課程に改正された。

一方、明治一二年三月から一年間予備科が設置された。その修業期は六箇月とされたが、毎月末に成績優等な者が順次本科に編入されることになっていた。この予備科は当時東京府下に正則英語学校が少なかったことに鑑み、商法講習所入学志願者に必要な英語力を養成する目的で設けられたものであった。その教科目に、モルレー氏文法 (Lindley Murray: English Grammar)、ブラウン氏会話 (Samuel R. Brown: Colloquial Japanese: or Conversational Sentences and Dialogues in English and Japanese)、英文書取、英習字、英作文などがあげられているのを見ても、<sup>(3)</sup> その語学習練が正則英語の授業を主体とするものであったことが知られる。このような予備科が本科としての商法講習所の入学難を緩和する目的で設けられたのであるが、そのことは、商法講習所での就学にとって英語学習の負担がいかに重いものであったかを物語っている。

明治一一年六月、ホイットニーが満五年という任期を半ばにして辞任し、それと前後して英国人 F・A・メー

ア (Fredrick Adrian Meyer) が雇傭された。メーアは、中国において商業実務に従事したあと来日して、高知県英語学校教師、開成学校教師等を経た人で、明治十一年四月、商法講習所の教務員として雇われ、同年一月に正式な教師となつて、簿記法を中心とする商業教育の担当者としてホイットニーの後任の役を果たした。しかし、商法講習所の廃止後、明治十八年二月に、海軍兵学校に転任している。

一橋の英語の歴史にとつて特筆されるべき英国人教師は、明治十二年二月に商法講習所教師として就任した A・J・ヘア (Alexander Joseph Hare) (一八四八—一九一八) である。ヘアが、ホイットニーやメーアのように、商法講習所に商業教育担当の教師としてではなく、上記の予備科での英語教師として就任していることに注意される。以来、東京商業学校時代および (東京) 高等商業学校時代を通じ、大正七年五月九日病歿する直前まで、三九年間にわたつて本学の英語教師として勤続し、数代に及ぶ多数の同僚および学生卒業生の敬愛をあつめた。

ヘアはロンドンに生まれ、リッチモンド・セミナリでラテン語およびギリシャ語を学んだのち、ドイツおよびフランスの大学に修学し、来日して海軍雇員となつた。北米に渡り、再度来日して神戸と横浜のプロシヤ公使館の翻訳官や、神戸商業会議所の書記を務めた。上京して、海軍兵学寮や佐野鼎私塾 (開成学園の前身) などで英語を教えたのち、明治一二年、商法講習所教師に招聘された。以上がヘアの履歴であるが、ヘアのその後のことについては、さらに第二期の章で述べる。

(1) 島田三郎『矢野二郎伝』(実業之日本社、大正二年) 五四頁。

(2) 手塚竜麿編『商法講習所』九〇—九二頁。

(3) 『商法講習所』六八、七六頁。

二、東京商業学校時代（明治一七年～同二〇年）の英語

これより先、明治六年一月に一つ橋門外護持院ヶ原（今の如水会館のある辺り）にあった開成学校がその専門部を分離させて、それを東京開成学校（東京大学の前身）と称した。それと同時に、語学生徒からなる普通部は旧校舍に留まり、文部省所轄の東京外国語学校が成立した。明治一七年三月、この東京外国語学校内に、付属校として高等商業学校が設置された。

同じ明治一七年三月に、商法講習所が東京府管轄から離れて農商省直轄となり、東京商業学校と改称された。翌一八年五月に文部省所轄に移るが、同年九月には、前記東京外国語学校およびその付属高等商業学校と合併して、体制を拡充させた東京商業学校が、神田区一つ橋通り町一番地の旧東京外国語学校舎に開設されることになった。

一つ橋移転後の東京商業学校における高度に充実した英語の授業内容についてはのちに述べることとして、明治一九年一月に、京橋区木挽町の元東京商業学校跡に設置された付属商工徒弟講習所について触れておく。これは商工の子弟に実用卑近の学術を授けるための付属施設であったが、ここでも、本校におけると異なった趣旨からであるにせよ、英語が重要な科目であったことは想像に難くない。なお、この付属商工徒弟講習所は、明治二三年一月、東京職工学校（のちの東京高等工業学校）に移管された。

商法講習所が東京商業学校と改称されたところから合併時に至る時期における英語科のスタッフの状況については、知りうる資料がほとんどない。ただ、商法講習所時代から引き続いて英語を教えていたA・J・ヘア以外の

英語教師としては、鈴木熊太郎と伊賀陽太郎の二人をあげることができるといえる。

鈴木熊太郎（一八六二—一九四二）は仙台市に生まれ、明治一四年二月に商法講習所を卒業し、明治一七年一月商法講習所教諭として就任し、同年八月東京商業学校助教諭となった。明治一九年五月に一旦退職したが、引き続き雇員として務め、高等商業学校への昇格後の明治二四年八月から翌二五年一月までは教授として在職している。長男鈴木四郎氏（明治四五年東京高商卒）が昭和四二年一月二七日付けで母校に寄せた便りに、「性格極めて俊敏、頭脳すこぶる明晰、特に英語、数学に長ず。反面生来ユーモアに富み、奇言奇行あり。矢野次郎先生にいたく私淑し、大いに愛せらる。小矢野のニックネームあり」とある。母校退任後は外国貿易事業に従事し、海外貿易界に雄飛した。

語

伊賀陽太郎（一八五三—？）は高知県出身で、米国で一年余り商社員として商業学を実地修学したのち、明治一七年四月、東京商業学校発足とともに、英語担当の教授心得に任ぜられ、明治二二年一二月に教諭となり、のち明治二三年一二月から二七年五月まで高等商業の教授として在職している。

英

英国人教師としてA・J・ヘアは別として、日本人で、英語ないし英語教育の専門家と称しうる教師は、明治一八年の合併時に、東京外国語学校とともに、東京商業学校に所属替えさせられた永井尚行をもって最初とする。在職期間は明治二五年四月までの六年半ほどであるが、旧東京外国語学校と本学との関係を経歴上に具象し、神田乃武時代に先立つ一橋英語の草創期を代表する英語教師として注目される。

永井尚行のことは次節に改めて述べることとして、そのほか、明治一八年の合併後二〇年一〇月までの東京商業学校時代に英語教師として在任していた人に、奥村忠三郎（一八六八—？）（明治一九年六月から二三年九月

まで助教諭、その後二六年六月まで助教授)、中山三保太郎(一八五九?) (明治一九年六月から二一年一二月まで助教諭)、原錦吾(一八五六?) (明治一九年八月付属商工徒弟講習所雇、二〇年三月から二二年九月まで助教諭、その後教諭)、江口定條(明治二〇年度から二一年度まで付属商工徒弟講習所助教諭)がいる。これらの人はいずれも商法講習所または東京商業学校出身で、母校で教鞭を執った人ばかりであるが、ほかに毛色の変わったものにつぎの人がいる。

竹越与三郎(一八六五~一九五〇)は新潟県出身で、慶応義塾を出て、明治一九年度に付属商工徒弟講習所雇で英語を教えた。のち評論家・歴史家として活躍し、また政治家として文部参事官・衆議院議員・貴族院議員・枢密顧問官を歴任したが、英学関係では『マコウレー』(民友社「二文豪叢書」明治二六年)や、交詢社『日本経済史』の英訳 *Economic Aspect of the History of the Civilization of Japan* (ロンドン、アレン・アンド・アンウィン社、大正八年)の著がある。

そのほか、名川輔三郎(明治一九年度から二三年度まで助教諭)、村松守義(明治一九年度雇)、福本元造(明治一九年度雇)、名井敬之進(明治一九年度雇、訳書に『自由貿易論』(明治一四年、Augustus Mongredien: *Free Trade and English Commerce* の訳)がある)がいる。

つぎに、明治一九年から二〇年にかけて、尋常科三年と高等科二年の五箇年中に英語の授業に使用された教科書を『高等商業学校一覽』によって記してみる。

習字、スペンセリアン習字本(*Spencerian System of Penmanship*)。文法、ブラウン氏文典(*Goold Brown: The First Lines of English Grammar*)、ノーデマン氏修辭書(*C. W. Barden: Shorter Course in Rhetoric*)。

読方、スウィントン氏第五読本 (Swinton's Fifth Reader and Speaker)、チェインナー氏第五読本 (Chambers' English Readers, Book 5)。解釈、マコーレー氏フレン・クームラングズ (T. B. Macaulay: Warren Hastings: An Essay)、マコーレー氏ツラノン伝 (T. B. Macaulay: Sir John Malcolm's Life of Lord Clive: An Essay)、マコーレー氏英国史 (T. B. Macaulay: The History of England from the Accession of James II)、スペンサー氏世態学 (Herbert Spencer: The Study of Sociology)、ゼボンズ氏論理学 (W. S. Jevons: Elementary Lessons in Logic)。講演、マンダウッド氏諸大家英文集 (F. H. Underwood: A Handbook of English Literature; British Authors)。

これはすべてイギリスやアメリカで出版された英語教科書か、評論・伝記・歴史書などの原本またはその翻刻本である。当時の書籍出版の状況を考慮に入れなければならないとしても、名は商業学校とはいえ、その修学者は、実はすでに高等商業学校の学生としての実力をもっていることを期待されたのである。上に列挙した教科書類は、そう考えられるほどの程度の高さを示している。

この教授要領にあげられている科目の中に「習字」と「書取」が含まれていて、本学の英語教育に見られる伝統的特徴の源を示唆している。注目されるのは、「会話」の科目のもとに、「日常必用の談話、なかならず商業にかかる諸般の事項を応答談話せしめ、商業上の慣用の言語はつぶさにこれを教え、生徒をして実際教員または同級生徒と対話せしむ。ただし対話の際は生徒の音調・語勢・態度等につき教師最も注意してこれを正すべし」という注釈が付けられていることである。この説明はそのまま明治二〇年度の高等商業学校の教授要領に、また少しく字句を簡略化して、明治二一年度のものに、引き継がれているのであるが、これからうかがわれることは、

ここに重視されている英語教育はあくまでも実業教育の一環としてのものにはかならないことである。

三、高等商業学校時代前期（明治二年～同五年）の英語

明治二〇年一〇月五日、東京商業学校が高等商業学校に昇格し、これまでの尋常科・高等科が廃止されて、予科一年・本科四年（明治二二年から本科三年）という課程となった。それ以前から明治二五年四月まで唯一の英語担当の教諭・教授の重責を担ったのが永井尚行であった。

永井尚行は、安政二年（一八五五）十一月二三日江戸深川（今の江東区）の幕臣の家に生まれ、明治二年から七年まで大学南校（東京開成学校）で英語および普通学科、のちに理科を修業し、東京英語学校（のち東京大学予備門）と東京外国語学校漢語学科とで英語を教えたが、明治一七年八月、東京外国語学校の専任教諭となり、同校付属高等商業学校の英語教員を兼務した。翌一八年九月に東京商業学校に合併されると同時に、その教諭に任ぜられ、明治二〇年に高等商業学校へ昇格するにつれて、教授になった。

このように、英国人教師へアが木挽町の商法講習所生え抜きの英語教師であったとすれば、永井尚行は一つ橋の東京外国語学校生え抜きの英語教師であり、しかも生粹の官学出の正則英語を身につけた教育者であった。

ここに特筆すべきと思われるのは、『一橋大学年譜I』の明治二二年九月の項に、後年神田乃武時代に世に一つ橋英語の名を高からしめるに至った「英語会」が「幹事、教員永井尚行」のもとで新設された、と記されていることである。同項にはさらに、「一〇月より毎月一回開催し、英語をもって演説・対話等をさせ、もっぱら英語の練熟と談話間の姿勢を正しくさせることを目的とする」とある。ここに実践英語を重視する本学の伝統の基が築かれたとみるべきであり、その衝に当たったのが永井尚行教授であった。

さらに、同年譜の明治二十一年一月二五日の記事に、「英語会の大会を帝国大学講義室において開催する。演目一八。午後六時開演。朝野内外の来賓男女場内に満つ。同八時戸を鎖して入場を謝する」とある。もって、この時期における学生の英語学習の熱意とその成果が測り知られる。もっとも、この英語会は明治二十三年の大会でシェイクスピア劇シーザー殺害の場を盛大に演出して以来、一部の固陋の人々の反対によって中止させられ、明治二十七年神田教授の後援のもとに再組織されるまで中断している。<sup>(1)</sup>

しかし、永井尚行の著述業績には何ら知られるところがなく、明治二十五年四月、三六歳の時に高等商業学校を辞任して、錦城学校尋常中学に教頭として就任して以後の履歴については知るすべもない。察するに、この人の後半生は地味な英語教師としての生活に費されたものらしい。

永井尚行のほか、この時期の英語教官としては、前時期から引き続いて在職していた伊賀陽太郎と、明治二十一年八月から二十四年八月まで教授として英語を教えたつぎの人がいる。

大隈英麿（一八五六～一九一〇）は岩手県盛岡市に生まれ、アメリカのプリンストン大学理学部を卒業し、帰国後大隈重信の養嗣子となり、明治一五年一〇月、東京専門学校（早稲田大学の前身）の創立とともにその初代校長を務めた。明治二〇年、仙台に設置された第二高等中学校（のちの第二高等学校）の教諭となるが、翌二十一年八月から二十四年八月まで、高等商業学校の教授に任ぜられ、英語と理化学を教えた。その後、早稲田中学校や早稲田実業学校を設立してその初代校長を務めたが、晩年には郷里盛岡に閑居し、明治四三年同地で長逝した。

明治二五年度は、日本人の英語教師としては、井上十吉、長谷川方文、佐藤顕理、佐藤毅、下野直太郎という嘱託講師しか在職していない年である。このうち、のちまで長く勤続した長谷川方文と下野直太郎のことは次章

で述べることとし、ここではほかの三者について触れておく。そのうち、井上十吉と佐藤毅はともに約一年しか本学に務めていなかったが、どちらも日本の英学界に令名を馳せた人である。

井上十吉（一八六二～一九二九）は徳島市出身で、十年間英国に留学後、第一高等中学校（のちの第一高等学校）の教授を務めるかたわら、明治二五年九月から翌二六年六月まで高等商業学校に嘱託として英語を教えた。その後は外務省の翻訳官を勤務しながら早稲田大学・学習院・高師などで教鞭を執った。『井上英和大辞典』（至誠堂、大正四年）、『井上和英大辞典』（至誠堂、大正一〇年）の編者として有名であり、『英文忠臣蔵』（中西屋、明治四三年）、『英訳・東郷元帥伝』（発行所未詳、昭和四年）などの訳業や英文著作 *Home Life in Tokyo*（古作勝之助発行、明治四三年）その他がある。神田乃武よりも一〇歳ほど若く、また一〇年ほどあとに世を去ったが、この両者は同時代に生きた英学界の二泰斗として、何かにつけて対照的に論ぜられることが多い。

佐藤毅（一八六六～一九二三）は山形県出身で、九年近く米国に留学して、カリフォルニア州バシフィック大学とカリフォルニア州立大学を卒業し、帰国後、明治二五年九月から翌二六年一〇月まで高等商業学校の講師を嘱託された。その後、商工中学校・早稲田実業学校・日本英学院等で英語を教え、明治四〇年には東京英学校を創立し、その経営に当たった。

佐藤顕理（一八五九～一九〇五）は東京に生まれ、一三歳のころ静岡学問所に入所して米国人クラーク (Edward Warren Clark) についで英語の初歩を修め、沼津中学校卒業後には、旧カナダのメソジスト教会の英国人宣教師であるマクドナルド (Davidson MacDonald) とシーチャム (G. M. Meacham) について英文学を修業した。明治二二年一月から二六年五月まで高等商業学校に講師を嘱託されたが、同時に、またその後にはわた

って、東洋英和学校・麻布中学校・神田英語学校などに教鞭を執った。「人に英語を教えるにきわめて丁寧であったが、しかもすこぶる厳格であって、その威をのみ見るものはいずれも身震いをしたほどであった」という。<sup>(2)</sup> 福田徳三博士（明治二七年高商卒、同二九年研究科修了）が佐藤顕理の門人であった。のちには国際ジャーナリストとして活躍した。著書に『英語研究法』（文声社、明治三五年）その他があり、英訳書も数点数えられるが、特に明治二九年に島田三郎著『開国始末』を英訳して大日本図書株式会社から公刊した *Agitated Japan* がすぐれた訳業として好評を博し、神田乃武からも激賞されている。（神田乃武の書評は『太陽』第二卷五号、明治二九年三月号に載せられ、*Memorials of Naibu Kanda* 一六九〜一七五頁に収録されている。）なお、名はもと「重道」といったが、英王ヘンリー八世の雄々しい態度に感銘して「顕理」と改名し、みずからも *Henry Satoh* と署名していた。<sup>(3)</sup>

この時期の外国人教師としては、ヘアのほかに、明治二四年度から二五年度にかけて、嘱託にジャバース・ホームズがいるが、この人の国籍その他については不明である。また、英国人エドワード・ガントレットが明治二四年三月から二五年四月まで講師として在任したが、この人は高商時代末から商大時代にかけて再任しているので、まとめて第三期に扱うことにする。

(1) 『一橋五〇年史』二五一―六頁。

(2) D生「佐藤顕理氏略伝」『英語青年』第五三卷一〇号、大正一四年八月一五日号。

(3) 飯田宏『静岡県英学史』（講談社、昭和四二年）五三―七頁。

二 第二期、高等商業学校時代後期および東京高等商業学校時代

(明治二六年〜大正八年)

一、一般情況

明治二六年四月、一つ橋の産みの親ともいべき矢野二郎校長が辞任した。それは、世に民主的思想が高揚するにつれ、単なる商業の技術的練達に加えて産業の総帥としての人間の完成を要望する内的機運がもたらした事態であり、いわば一つ橋発展の歴史の一里塚を象徴するものであった。同じ年の九月には学則が改正され、学課目に変更が加えられると同時に、教授講師陣に大更迭が行なわれた。英語科にあっても、長谷川方文に加えて、神田乃武・高島捨太・家永豊吉が加わり、特に長谷川・神田・高島の三者は、ヘアを除いて、一つ橋の英語教官としてかつて例を見ないほど多年にわたって勤続し、一つ橋英語の骨格を堅固不拔なものに築き上げることとなった。

ここにおいて、商業学への依存から脱却し、実用と教養の一体化を目的として、語学文学の本格的な研究教育を任とする英語科の体制が確立された。そしてこの体制の核心的存在が明治期における日本の英学界の開拓振興に甚大な功績をなした先覚者神田乃武であった。その後東京高商時代を経て商科大学時代にはいる時期に至るまで、本学の英語教育の中心人物となり、英語科陣営の強化発展を図り、学外に対しては一つ橋英語の名声を高からしめた主任教授としての功労の大きさは言を俟たない。実に、英語部門の一つ橋百年史にあって、この第二期は「神田乃武時代」と称しうるものである。

神田教授が学生に施した英語練磨の成果は英語会の華々しい活躍振りの上に如実に表された。一時中断されていた英語会は、明治二十七年に神田教授の指導のもとに組織替えされ再発足した。つぎに、『一橋五〇年史』（三八頁）の記事を引用しよう。

「このころ（明治二十九年一〇月）に至っては、The H. C. S. English Speaking Society といえは外人の間にもその名を知られ、会員も二百数十名に及び、通常例会は二回、そのプログラムは、1. Speeches, declamations, orations, etc. by members. 2. Speeches, lectures, etc. by professors and scholars. 3. Refreshments. 毎年一回の大会には多く外国の古典による劇、演説、暗誦に加えて、音楽部の唱歌もこれを助け、一つ橋の特色として、観衆堂にあふれ、盛大をきわめた。」

この大会での英語劇は背景もなく、会員である学生が正服正帽で演出しながら大きな舞台効果を挙げた。明治二八年三月の大会では、「地震加藤」の出し物で、やはり正服正帽の加藤清正が大好評を博したという。

明治二十九年八月には、学科課程にさらに大改正が加えられ、英語科も、従来予科一年毎週一〇時間、本科一年毎週八時間、二年三時間、三年三時間であったものが、予科一年毎週九時間、本科一・二・三年とも毎週六時間に改められ、質的充実が図られた。

また、明治三二年九月には、学内に修業年限二年の商業教員養成所が付置された。それがのち明治四四年に修業年限四年に延長されるが、本学の英語教官の多くがこの教員養成所にも出講し、いっそう学内の英語教育が拡充され活発化されることとなった。

一方、日清戦争のあった明治二〇年代の終わりには、世に外国語学校の復興を願う機運が澎湃として高まっ

た。すでに触れたように、明治六年に文部省によって認定された東京外国語学校は明治一八年に東京商業学校に合併させられ、結局消失する憂目を見るに至ったのであるが、当時の国会内でこれを復活させようとする意見が盛り上がり、その結果、明治二九年には、衆議院および貴族院の両院が一致して改めて外国語学校を設立しようという建議案を国会に提出し、それが採決されることとなった。<sup>(1)</sup>こうして翌明治三〇年四月二二日、東京高等商業学校内に付属外国語学校が設置され、同時にその主事が置かれることとなり、神田乃武がその任に当たった。この付属外国語学校が明治三二年四月四日に本校から分離し、神田区錦町に新築校舎を得て、新しい東京外国語学校が誕生し、爾来現在の東京外国語大学への道を辿ることとなった。同時に、主事であった神田乃武は東京外国語学校初代の校長を兼務することとなったが、その任期は一年に留まり翌三三年四月にはその職を辞している。

付属外国語学校が設けられた明治三〇年のころには、同校の英語科を教えたのは、神田乃武のほか、浅田栄次と石川文吾であった。神田乃武と石川文吾のことは次節に改めて述べることにして、ここでは浅田栄次について触れておく。

浅田栄次（一八六五～一九一四）は山口県徳山の出身で、米国のノースウエスタン大学、コロンビア大学およびシカゴ大学で神学と言語学を修め、帰国後青山学院教授を経て、明治三〇年五月に高等商業学校英語科講師に、同年八月に付属外国語学校教授に任ぜられた。明治三二年に東京外国語学校が独立してからは一五年間その英語科の主任を務めた。英米文学の専攻者ではないが、卓抜した英語の実力を持ち、また教育にきわめて熱心なキリスト教信仰者であり、よく学生の信望を集めた。

ふたたび、高等商業学校の組織発展の模様を目を転じれば、明治三〇年九月には、従来の研究科に代わって専攻部が設けられ、明治三二年九月にはその修業年限が一年から二年に延長され、早くも大学昇格の實質的基礎固めが進められた。こうして明治三五年四月、勅令第九八号によって、高等商業学校が東京高等商業学校と改称される時を迎えた。

その間に、英語科のスタッフとしては、明治三二年に小谷野敬三と花輪虎太郎が、さらに明治三五年に山口鍬太と英国人教師アーサー・ロイドが加わって、いよいよその陣営が堅固なものとなった。

ここに、日本の英語教育史上に大きな影響を与えた記念すべき事柄の生じたことを記さなければならぬ。明治三三年八月から翌三四年一二月まで神田乃武教授は英語教授法研究の目的でイギリスおよびドイツに留学した。少年時代に米國マサチューセツ州のアマスト校で英語を修学した神田乃武にとって、この留学は、かねて唱えていた音声言語の習得を基とする自然式教授法の理論を实地に確認し、発展させる上で大きな意義をもつものであった。それと同時に、高等商業学校のためイギリス人の英語教師を求めるといふ公務を帯びたものでもあった。(当時、英語担当の外国人教師として、ヘアのほかには、明治三二、二年度に英国人で *History of Japan*, 3 vols. (1903~1926) の大著を遺したジェームズ・マードック (James Murdoch) (一八五六~一九二二) と、明治三三年度に米國人 D・B・スプーナー (D. B. Spooner) が在任していたにすぎなかった。) 神田乃武はその任を果たしたのであるが、神田乃武に滞英中に面会を受け、斡旋されて、高等商業学校の外国人教師として赴任したのが、英国人ハワード・スワン (Howard Swan) であった。

スワンが明治三四年九月から三六年八月まで東京高等商業学校で英語教師を務めたが、学内において徹底した

グワン・メソッド (Gouin method) による英語の授業を行なったほか、学外において当時の日本の英語教育会にグワン・メソッドを熱心に唱導して、多大な刺激を与えた。このハワード・スワンの生没年や経歴について知りうる資料がないのは遺憾であるが、すでに一八九二年 (明治二五年) に、一連の連鎖的動作を伴った直接法による外国語教授法を体系づけたフランス人フランスワー・グワン (François Gouin) の著 *L'art d'enseigner et d'étudier les langues* (一八八〇) をヴィクトル・ベチ (Victor Bets) とともに英訳し、*The Art of Teaching and Studying Languages* (ロンドン、フィリップソ社、一八九二) を出版している。東京高等商業学校の在任はわずか二年に留まったが、その間に、明治三五年七月二五日から八月一四日まで文部省夏期講習会において、また翌三六年七月二七日から八月八日まで国民英学会主催中等学校英語教員夏期講習会において、グワン・メソッドによつた英語教授法を講演し、聴講者一同に多大な感銘を与えた。明治三五年における講習会の様子を、『中外英字新聞』が八月三〇日号でつぎのように報じている。<sup>(2)</sup>「先ごろ高等商業学校内において開催し文部省の英語夏期講習会は有名なるスワン教授の担当にて、その得意の英語教授法を講演することなれば、開会前より一般英学者の視線を引き、講習者の多き無慮百一〇名に及び、講師の熱心なる、その講習の斬新なる、けだし夏期講習会として空前の成功を収めたるが如し。新知識新観念を吹き込まれたる講習員はこれより各々自家の意見経験に照らして取捨参酌して、別にわが国中等教育に適切なる新教授法を案出し実行するなるべし。」さらに、同年八月三〇日付けの同誌「走馬灯」欄は、「スワン氏が黒板に画く略図の巧妙なるには講習者一同を驚かしたり。白墨を取つて二、三度も手首を動かせばすぐに卓子や馬や人物が現出し、その速きこと手妻使いの如し。また絶えず身振り手真似をもつて字義を説明するに妙真に迫まり、しかも上品にして少しも下卑たところな

し」と、その生彩に富んだ講演振りを伝えてゐる。

このいかにも精力的で才氣にあふれた外国語教育家は、本校在任の二年のうちに、*The Flashes from the Far East* (博文館、明治三五年)、*松田一橋よとの共著 Japanese Scenes in English* (博文館、明治三五年)、*勝俣銓吉郎との共著 『応用英和新辞典』 (Thesaurus of Everyday English, 3 vols. (博文館、明治三五年))*、*スワンが明治三四年に英国から来日した折の旅の紀行書であり、つぎは二度の講習会での教本であり、最後のものは日用英語の豊富な文例に一々文体価値を注記した点に異色が認められる学習辞典である。*

日本の英語教育界は、この時期より二〇年後に来日するハロルド・パーマー (Harold Palmer) (一八七七—一九四四) の唱える口頭教授法 (Oral method) によって一大革新をもたらされるのであるが、ハワード・スワンはその先駆者としての役を果たしたものとみなされよう。<sup>(3)</sup>

ハワード・スワンの退任後に米国人の T. I. チャップマン (T. I. Chapman) が明治三六年度に赴任しているが、一年で辞職している。そのあと明治三七年から英国人 E. P. ルース (Ernest Percy Ruse) が、また明治三九年から同じく英国人 ヘンリー・ブレイ (Henry F. Bray) がスタッフに加わり、両者ともその後長く東京高等商業学校の英語教師を務めることとなる。

明治四四年は東京高等商業学校の英語科にとって相次ぐ不幸の重なる年となった。この年の四月二日に花輪教授が、五月九日に高島教授が、そして十一月二七日にアーサー・ロイドが、いずれも在職のままに病歿している。同時に、神田教授は、これまで兼任教授を務めていた学習院を辞し、以後本学の英語教育に専念するようになった。

第二期の一般情況についての叙述を終るに先立ち、神田教授指導のもとでの英語会が年々学生の英語練達の見事な成果を示し、隆昌しつつあった情況について述べたい。明治三〇年十一月には一つ橋会が成立し、英語会は一つ橋会内の一部門として位置づけられたが、その実質的活動は従前通り維持され、特に年一度の大会は都下の年中行事とみなされるほどにまで一つ橋英語の声価を学外に高めた。つぎに『英語青年』第一三卷九号（明治三八年五月二一日号）の記事を引用しておく。

「東京高等商業学校第一一回英語会は、去る五月一三日午後五時より同校大講堂において開かれたり。式は君が代の奏樂、Prof. Baron Kanda の Opening Address に始まり、一四番の Recitation, Dialogue, Speech, Music 等いずれも大喝采のうちに演じ終われり。……本科三年生の演じたる “The True History of Mr. William Adams, English Pilot” は Prof. Arthur Lloyd の新作（本章第二節に述べるアーサー・ロイド著 Dopperu and Dialogues の二四五—二六二頁に収録されてゐる）にして、Adams の歴史に事密せて日露戦争を諷刺したるもの。……最後には本科二年生の演じたる As You Like It が……Act II の three scenes を演じたるものなるが、Prof. E. Ruse 夢中になつて稽古したりと聞きしが、Ruse 氏はいとも満足の体なりき。要するに、この会は最も古き歴史を有し、Baron Kanda その他内外知名の諸教授の指導のもとにあるとて、発音は言うに及ばず、すべての点において進歩の跡を見るを得べく、本会の講演者中最も巧妙なりしは T. Okonogi（のち商大時代に専門部で商業英語を教えた小此木為二教授のこと）なりき。」

この英語会大会のハイライトが神田教授の開会の辞であり、「神田さんの Opening Address だけを聞きに来るものが多い」（井上鳳吉氏談）といわれるほどであった。『英語青年』第三六卷五号（大正五年十二月一日号）

のつぎの記事はこのことを偲ばせよう。

「十一月一日…例によって Prof. Kanda の opening address である。教授は流暢な英語で前夜の audience のことから説き出して、今宵は select audience だから、inspiring, encouraging である述べ、school year の arrangement が変わったので、今年からは秋開くことになった。桜と別れを告げて菊を迎えたのであるが、桜も菊も花は目を喜ばすばかりである。しかし英語会は eye と ear とをともに楽しませると言い、一転して、高商の英語はわが国における practical English の highest standard を示すものである。これは我田引水ではなく impartial な意見である。現に慶応・早稲田の英語が高商のそれを excel したという批評を聞いたことがない。願わくはわが校のこの位置をいつまでも維持したきものである。……と述べている。」

語

英

(1) 『東京外国語学校沿革』(東京外国語学校、昭和七年)一〇八—一一頁。

(2) この引用およびこのつぎの引用は大村喜吉「Howard Swan の来朝」『石橋幸太郎先生還暦記念論文集・英語英文学の研究』(大修館、昭和三六年)二二九頁によった。

(3) 大村喜吉「英語教育の先覚者」『英語教育問題の変遷』(研究社、昭和四四年)一七六頁。

## 二、教授陣各個点描

第二期を通じて就任した英語担当の教官の一人一人について述べることにする。まずこの時期を代表する神田乃武から筆を起こす。

神田乃武(一八五七—一九二三)は東京築地に生まれ、蘭学者神田孝平の養子となった。開成学校に学んだのち、明治四年一四歳の時少弁務使(のちの駐米公使)森有礼に従って渡米し、マサチューセッツ州のアマスト高

等学校および同大学を卒業した。その間に、ポストンで近代語学校を営んでいたソーヴァール (M. Sauveur) の夏期学校に出席して、会話を主とする自然法による外国語教授法を学び、またウエストフィールド州立師範学校で一学期間教育制度を修めて、明治一二年の暮れ帰国した。翌明治一三年四月に東京大学予備門の講師となつて、自然地理を英語で教え、同時にその予備校に当たる共立学校で英語を教えた。既述の永井尚行とは、時期を同じく東京大学予備門の教員を務めたことになるが、永井尚行二四歳、神田乃武二三歳の時に当たる。また共立学校では、のちに英学者・英語教育家として令名を馳せる山県五十雄 (一八六九～一九五九) や岡倉由三郎 (一八六八～一九三六) に英語を教えている。明治一五年九月には東京大学文学部勤務を命ぜられ、明治一九年一月には同文科大学の教授に任ぜられて、ラテン語やギリシヤ語を教えた。文士夏目漱石 (一八六七～一九一六) はこの文科大学英文学科を明治二三年九月に卒業したが、神田乃武に教わっている。明治二二年に元良勇次郎 (一八五六～一九二二) ・外山正一 (一八四八～一九〇〇) とともに東京芝に正則予備校 (のち正則尋常中学校) を創設するが、これは、高等教育を志望する子弟のために徹底した欧米式自由教育を授けようとする理想を実現したものであり、当時の教え子の一人にのちの東京商科大学学長上田貞次郎がいた。

明治二六年九月に高等商業学校の教授に迎えられたが、神田乃武のわが国の英語教育界に対する先駆者的貢献はそのころに始められている。明治二八年から二年間、新しい総合教養雑誌『太陽』(博文館発行)の英文欄の編集を担当した。のちの福田徳三博士が神田乃武の『太陽』編集の仕事を手伝い、子弟が苦勞を分かち合ったことが、Memorials of Nabu Kanda の一六二―一六八頁に<sup>46</sup>つづさに報ぜられている。

この『太陽』の第二卷四号(明治二九年二月号)に発表した評論“English in Middle School”は日本の英

語教育史上重要な文献となっている。それは、神田乃武がアマスト校修学の時以来抱いていた外国語の自然式学習法 (Natural method) の理念に基づき、聞き・話し・読み・書きのいわゆる四技能の総合的練磨を説き、直読直解 (direct reading) を提唱したものである。当時ややもすれば、発音読方を軽視し、文法訳読だけを能とする風潮に大きな衝撃を与えたものであり、実に爾来八〇余年を経出した今日の英語教育界にとっても、なお聞くべき価値を失わない卓見である。

そのころから明治三三年八月の外遊出発のころまでは神田乃武の生涯のうちでも公私とも最も多忙をきわめた時期である。明治三〇年八月には付属外国語学校の主事を兼ね、翌三一年の五月二日から六月六日まで高等商業学校校長心得の重任を果たした。同年七月二日に養父孝平が歿し、七月一九日付けで男爵の位を継いだ。明治三二年四月から翌三三年四月までは、新たに独立した東京外国語学校の初代校長を兼務した。

一方、その間に後々わが国の中等学校用英語教科書として画期的足跡を留めることになる Kanda's New Series of English Readers (三省堂発行) の一・二巻が明治三二年四月に、三・四・五巻が翌三三年一月に、それぞれ刊行されている。それは神田教授の自然式教授法を具現し、学習者の四技能を円満に伸長せしめる主旨をもつリーダーであった。のち、版を重ね、数度の改訂を経て、大正五年には Kanda's Crown Readers (一～五巻) とし、歿後の大正一五年には長岡擴との共編で The King's Crown Readers (一～五巻) とし、やうに昭和六年には Revised New King's Crown Readers (一～五巻) として発行され、長く中等学校用教科書界に君臨し続けることとなった。

また、のちに「神田文典」の名で、斎藤秀三郎 (一八六六～一九二九) の「斎藤文典」と並んで英語教育界を

風靡するに至る英文法教科書も、明治三二年一月に *Intermediate English Grammar* とし、翌三三年二月に *English Grammar for Beginners* とし、三省堂から刊行され始めている。これらは中級と下級であるが、その上級に当たるのが *Higher English Grammar* であるけれども、「三省堂出版リスト」にその初版発行の年次が記録されていない。しかし、のも明治三六年に *English Grammar for Beginners* (改訂版)、明治三七年に *Intermediate English Grammar* (改訂版) と *Higher English Grammar* (改訂版) がそれぞれ発行されている。この上・中・下の三巻を二巻本に編成し直して刊行されたのが、明治四二年の *Kanda's English Grammar* であり、大正九年には、それが改訂されて *Standard English Grammar* として発行された。ここで注意したいのは、同じ時代に流行した斎藤秀三郎編の英文法教科書、すなわち「斎藤文典」に比べ、「神田文典」は隠健で、折衷的かつ標準的なことを特色としており、いかにも編者神田乃武の円満な人格と字風を反映していることである。<sup>(1)</sup>

神田乃武の日本の英学界への貢献として英語教科書の編纂とともに記すべきであるのは、英語辞典編纂事業に参画し、それを指導したことである。早く明治二四年、文科大学教授時代にイーストレーク (F. W. Eastlake) との共編で『和英袖珍新字彙』(三省堂) を発行したが、これは簡便なポケット型小辞典として明治期を通じて愛用された。明治三五年には当時の各界の代表する学者たちとの共編で『新訳英和辞典』(三省堂) を刊行している。これはそれまでの類書にくらべ、學術専門語について数段の進歩を示し、一時期大変な好評を博した。明治四四年には、それを拡充発展させた『模範英和辞典』(三省堂) が出版されたが、この辞典の特徴としてあげべき点は、語彙が増加されたほか、旧来の英和辞典に見られることのなかった用例が不十分ながら訳語のあと

に添記されたことと、百科辞典的要素に加えて語学的要素が強化されたことである。これが大正八年に増訂されて、『模範新英和大辞典』（三省堂）となって現われるのであるが、「模範（新）英和」が昭和期における高水準の精度をもつ英和大辞典への橋渡しの役を果たしていることを思うとき、改めて監修者としての神田乃武がわが国の英語辞典発達史上に占めた地位の重さを評価せざるをえない。<sup>(2)</sup>

なお、大正一一年には、同じく三省堂から、金沢久との共編で『袖珍コンサイス英和辞典』を発行している。これが、従来のウェブスター式発音表示に代えて、ジョンズ式の一音一字主義音標文字を初めて採用したものであるが、大正末期と昭和初期をいうに及ばず、現在に至るまで長く学習者および一般社会人に愛用され続けている「コンサイス英和」の始祖をなしている。

再び時代を遡って、明治四四年九月、この年に花輪・高島の両教授が急逝することがあって、明治三五年九月以来兼務していた学習院を辞任し、以後生涯をまっばら本校のために捧げることとなった。大正五年一月には願いによって本官を免ぜられ、本校最初の名誉教授の称号を授与されたが、その後も、大正九年四月学校が東京商科大学と昇格したのちまでも講師を嘱託されて教壇に立っていた。

神田教授の教室での授業振りについては、親しく教授の薫陶を受けた上田辰之助（大正五年高商専攻部卒）がつぎのように語っている。

「神田先生は英語の実用的な方面に秀でておられ、ことに演説は英米人に負けぬほどご堪能でしたが、同時に教養として英米文化を身につけられたきわめて洗練された紳士であられました。それで私どもは先生から英語を学ぶと同時に、人格的にも大きな影響を受けました。……教室の先生はチョークに紛れた教師というよりも、静

かに上品なお話はおもしろかった。……私どもはエマソンのエッセイズを教えていただきました。私どもの一年上級ではディケンズの「二都物語」(A Tale of Two Cities)を講じておりましたが、日本語への訳出がお上手の上に、話術がまた特別にすぐれているので大評判でした。<sup>(3)</sup>」

この上田辰之助の言葉にもあるように、神田乃武の英語演説は英米人も舌を巻くほどに、自然で流暢で、しかも上品なものであった。それとともに、その英文書簡の巧みさも有名であり、『英語青年』第一九卷九号(明治四一年八月一日号)の「片々録」はつぎのように述べている。

「神田男爵の英文は自然的で、論文でも叙事文でもよいが、男が最も手紙が得意であるそうだ。日本人に出すのでも、相手に英語がわかれば必ず英文で書かれる。高島教授の話によると、高商のルース氏の如き、神田男爵の手紙には非常に感服している。それで、ルース氏は神田男爵に手紙を出す時に限って、注意に注意をして書き変えることがあるそうだ。」

神田乃武について述べるべきことはなお多いのであるが、ここにひとこと、神田乃武時代以後、商科大学時代を通して、本学の英語教官として就任した学力のすぐれた数々の人たちが、神田教授の推挙によっており、一つ橋英語教育の伝統を色濃く特徴づけたことを付記しておきたい。ことに神田乃武は早く明治一九年から文部省中等学校英語科教員検定試験(以下「文検」と略す)、また大正九年からは、同じく高等学校英語科教員検定試験(以下「高検」と略す)の試験委員を務めており、受験者で成績優秀な人材に着目し、本学の教官として推挙の労を取った。明治三〇年と明治三九年にそれぞれ文検に合格した浦口文治と長岡擴、明治四一年に文検に、大正九年に高検(第一回)に合格した五味赫、明治四〇年に文検に、大正九年に高検(第一回)に合格した内藤三介

と西村穉、大正一〇年に高検に合格した渡部行三と古瀬良則は、いずれも神田教授の推挙をえた人たちである。その他文検・高検合格者以外では、舟橋雄・阿久津謙二および英国人教師ジョン・アイルズ (John Eiles) が神田教授の知遇を契機としている。第三期商大時代の本学における英語教育の特色の形成に神田乃武のあずかるところが大きかったのである。

つぎに、第二期における英語科教授で、神田乃武以外の人々を就任年次の順に述べる。

A・J・ヘア (Alexander Joseph Hare) は、第一期の商大講習所時代に始まり、その後東京商業学校時代と (東京) 高等商業学校時代の末期に至り、大正七年三月に満期解雇となるまで、三九年の長さにわたって、本学で英語を教えている。英作文や商業文を担当していたが、藤本幸太郎名誉教授 (明治二八年高商専攻部卒) は、「当時すでに相当の年齢に達せられていたから、往年のような元氣もなかったようであるが、毎時間規則正しく出席せられ、教えて倦まない風であった。恐らく英人として最もよいタイプの紳士であったろう。一つ橋出身の人々が実業界において役に立った学科は、恐らくブロックホイス先生の Foreign practice とヘア先生の Commercial correspondence の二つであろう」(『橋畔随想』『如水会々報』昭和三六年二月号)と語っている。また、英習字が堪能で、「明治時代の一円紙幣の裏面に綺麗に印刷してある英文はその handwriting によるもの」(阿部市助 (明治四三年高商卒)、『如水会々報』昭和三〇年四月号)であった。性温厚寡言で、大の日本蟲屋であり、その姓を漢字で「平谷」と書き、小石川区原町にあった自宅の標札にも「平谷」と掲げていたという (『英語青年』第三四卷一号 (大正四年一〇月一日号)、「片々録」)。大正七年五月九日、退任後一月余りの時に病歿している。享年六九であった。墓は教えを受けた同窓会有志によって雑司ヶ谷外人墓地に築造された。著書

に『英作文のあやまり』（同文館、明治三八年）がある。

長谷川方文（かたよ一八五四～一九二五）は山口県防府に生まれ、東京大学法学部に学び、高等商業学校には神田乃武よりも一年半早く明治二五年四月に就任した。初め嘱託であったが、明治二九年一月には教授となり、大正九年四月学校が商科大学に昇格すると同時に退官している。『現代防長人物史・天』（発展社・大正六年）（付五八―九頁）によれば、「その性格に至りては謹厳重厚きわめて功名利達に恬淡にして、終始一誠天職をもって任ずる率直の士なり。しかも居常よく子弟と相伍し、人と交わるに毫も驕慢尊大の風なきは、接するもののつとに敬慕して惜かざるところ……」とある。教室での講義は手に入ったもので、「コナン・ドイルの『シャーロック・ホームズ』を教わったが、あたかも講談を聞くようで実に楽しかった」（井上鳳吉氏談）という。晩年には趣味として宝生流の話をたしなんだことで知られる。

下野直太郎（一八六六～一九三九）は岐阜県出身で、高等商業学校を卒業して二年半後の明治二五年四月に母校に就任するが、初めの二年間は英語科の嘱託講師を務めた。明治二七年四月に教授となり、一時退官して保険会社に勤務したことがあったが、その後再度母校の教授を務め、昭和四年三月東京商科大学を依願免官されている。簿記学・商業算術を教え、英文簿記の権威としての誉れが高い。典型的な一つ橋人らしく、実学としての英語が非常に堪能で、教室でも「英文簿記の講義を流暢な英語で行なってノートさせた。授業中にされる雑談がよくこの先生の人生観を表わし、実に有益であった」（須藤斎治氏談）という。

E・J・ブロックホイス（Edward Joseph Blockhuys）（一八六〇～一九三二）はベルギーのアントワープ高等商業学校出身で、明治二五年一月高等商業学校の教師に就任した。（アントワープ高商出身で商業学担当

のベルギー人教師としては、最初はユリヤン・スタッペン (Ulian Stappen) が明治一八年に東京外国語学校付属高等商業学校におり、つぎにその後任としてアルチュル・マリシヤル (Arthur Marischal) が明治一九年一月から同二五年九月まで合併後の東京商業学校時代から高等商業学校時代にかけて在職しており、ブロックホイスはこのマリシヤルの後任として来任した。それ以来、昭和五年三月まで三十七年にわたって、商業実践・貿易実務・商業地理・商業算術を担当し、それを英語を通して講義した。蘊蓄深奥で精励格勤であり、長く学生の信望を集め、景仰の的となった。

家永豊吉 (一八六二—一九二八) は熊本県に生まれ、京都同志社英学校に学んだのち米国に渡り、オハイオ州オベリン大学およびメリーランド州ジョンズ・ホプキンス大学大学院で歴史・経済・政治学を修め、Ph. Dの学位を取得した。高等商業学校には明治二六年一〇月から三〇年五月まで英語を教えた。在米中にオベリン大学に能弁競争会で優勝し、同大学を代表して米国西部八大学の能弁競争会に出場したほどに英語に堪能な人であった。退任後は外務省翻訳官を務めた。

高島捨太 (一八六四—一九一一) は福井県出身で、明治九年から同一七年にかけて東京大学予備門と東京大学文学部選科に修学した。東京大学予備門が東京英語学校と称していたところで、永井尚行が同校の教員をしていた時期に入学している。そのあと米国のインディアナ州ディポー大学英文科を卒業して、高等商業学校に明治二六年一二月に講師を嘱託され、翌二七年六月から、四七歳の若さで亡くなる明治四四年五月九日まで、本校の英語担当の教授を務めた。明治後期の英語教育界において練達博識の聞えが高く、特に和文英訳を得意とした。神田乃武が編集していた雑誌『太陽』の英文欄を担当したこともあり、逝去の直前まで美術雑誌『国華』の英文社説

を執筆していた。著書に『和文英訳集 Random Leaves』（博文堂および東京堂、明治三九年）がある。

草野克己（一八六三〜？）は長崎県出身で、米国カリフォルニア州スタンフォード大学に学び、明治三〇年三月から同三二年六月まで高等商業学校に助教として在職し、英語を教えた。

小谷野敏三（一八五二〜一九三四）は神田乃武よりも五歳年上で埼玉県の生まれであるが、神田乃武と同じ米国アマスト大学を六年あとの明治一八年に卒業し、さらに明治二一年に同大学の修士号を取得している。明治三一年九月に高等商業学校の嘱託講師となり、翌三二年三月に教授に就任し、以来東京高等商業学校時代を経て、東京商科大学時代の大正一〇年三月の退官時まで、神田教授や長谷川教授とともに英語科の長老教授の役を果たした。「物静かで落ち着いていた。英語の発音は実にきれいだっただ」、『如水会々報』昭和三〇年四月号）と阿部市助氏が述べ、「小柄で地味な先生だった。アーヴィングの『The Sketch Book』や『Bracebridge Hall』を教わった」と泰山会会員諸氏が語っている。

花輪虎太郎（一八五七〜一九一一）は岩手県盛岡に生まれ、明治七年に東京開成学校を卒業した。（明治六年七月二四日発行の『文部省雑誌』によれば、その年に開成学校内理学校の教則が改められ、新設された理学予科第一級に花輪虎太郎の名が見られる。なお、その一級上に当たる理学本科第四級に永井尚行が在籍していた。）同時に、宮城外国語学校（のち宮城英語学校、さらに宮城中学校と改称された）の教諭となるが、そのころの教子の一にのちの英学界の泰斗齋藤秀三郎がおり、花輪教諭が齋藤秀三郎の担当教諭として英語の組織的手ほどきをしたという。<sup>(4)</sup>（ちなみに、花輪虎太郎は明治七年六月に宮城外国語学校に赴任し、明治一四年一〇月まで宮城中学校にあり、齋藤秀三郎は明治七年一月に宮城英語学校に入学し、明治一一年七月に仙台中学校を卒業

(5) 明治二〇年から同二三年まで第一高等学校の教授となるが、そのころ同校の学生であった夏目漱石・正岡子規（一八六七～一九〇二）・山県五十雄に英作文を教えた。その後第四高等学校の教授を経て、明治三二年四月に高等商業学校の教授に就任し、明治四四年四月二日、脳溢血で急逝（享年五四）するまで、本学の英語教師を務めた。その得意とするところは英作文・商業書簡文であり、明治三〇年代に鐘美堂から発行した *A Text-Book of English Composition*（改訂版は三巻本で明治三七年に内田老鶴圃から発行された）その他の英作文教科書は広く採用されて、明治期の英語教育史上に名を留めた。また、神田乃武との共編の *A Text-Book of English Commercial Composition*（啓成社、明治三六年）がある。花輪教授の授業風景として、阿部市助氏が『如水会々報』昭和三三年三月号で、つぎのように語っているのがおもしろい。「東北なまりがあり、頭がつるりとして、いかにも丈夫そうな先生だった。ある時、*She burst into a flood of tears.* という英文に出くわすと、先生一段と声を張り上げて『彼女は涙の洪水の中へ爆発した』と訳された。」

石川文吾（一八七七～一九四六）は東京出身で、明治三〇年七月、高等商業学校卒業直後に、神田乃武にその優秀な英語の学力を認められて、神田乃武が当時主事を務めていた付属外国語学校の英語講師に採用された。明治三二年七月高等商業学校助教として三年間ベルギーへ商業学研究のため留学を命ぜられ、帰国後の明治三五年一二月、東京高等商業学校教授に任ぜられ、それ以来、昭和一二年四月東京商科大学を退官するまで、商業学・簿記を講義した。語学としての英語を専攻していない教授によって、一つ橋の英語教育の実質的成果がいかに見事に挙げられたかという典型的な例が、「石川文吾教授の経済通論は英語の原書を用いたが、その講義のスピードが恐しく速い。原書のどの部分を話しているのか捜すのが大変。学期末の試験勉強には原書を読み返すのが

大変な苦勞」という須藤斎治氏（「一つ橋と英語」『如水会々報』昭和五三年二月号）の言葉に示されている。なお、著書にF・W・イーストレークとの共著『英和商売用会話』（三省堂、明治三十三年）、『高等商用会話』（早稲田大学出版部、明治三八年）などがあり、昭和二年のころには商業英語科教員検定試験委員を務めている。

山口鉦太（一八七二—一九三二）は神奈川県小田原に生まれ、米國ワシントン大学の政治社会学部を卒業し、東京高等商業学校には明治三五年一〇月に教授として就任し、商科大学時代には、昭和三年から専門部で英語科の主任を務めた。（当時予科では上條辰蔵教授が英語科の主任を務めていた。）学校では、主として一つ橋英語の一つの伝統ともいべき演説法（Elocution）を担当し、自編 *Selections from Modern Eloquence*（内田老鶴圃、明治四三年）を教科書に使用し、学生に一章ずつ暗誦させたという（村松恒一郎氏談）。ほかに、*American Oratory*（内田老鶴圃、昭和二年）や英作文教科書などの編者がある。温かな風貌で性陽気、同僚とは悠暢な談笑をもって交わり、常に春風駘蕩の気を醸していた。<sup>6)</sup> 教室では「赤ら顔で、チョッキには金鎖とメダルはドル金貨を下げておられた。さすがに中学の英語の先生と違ったきれいな発音が特別強く印象づけられた……<sup>7)</sup>」という（井口勇次氏（国立バイオニア会昭和五年組））。昭和七年一月九日在職のまま病歿している。

アーサー・ロイド（Arthur Lloyd）（一八五二—一九一）はインドのシムラに生まれ、英国ケンブリッジ大学卒業後、英国監督教会の宣教師として明治一七年に來日し、以来伝道のかたわら慶応義塾その他で英語を教えた。一旦カナダに去り、明治二六年に再度來日し、明治三〇年には神田錦町に英語専修学校を開設し、その校長を務めた。のち商大時代に専門部の教授となる五味赫は同校でロイドに英語を教わっている。東京高等商業学校には明治三五年九月から同四年一〇月二七日の病歿する時まで在職している。同時に、明治三六年四月から東

京大学に、ラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn) (一八五〇〜一九〇四) の辞任後、その後任として英文学講師を嘱託されている。ロイドは日本語を能くし、日本人およびその習俗の理解者であった。また、和文英訳を得意とし、学校でもその授業を担当した。また、学外では神田乃武らとともに文検試験委員を務めた。

ロイドの業績として特筆すべきなのは、明治文学の英語への翻訳に先鞭を着けたことであり、その成果としては、尾崎紅葉の『金色夜叉』の英訳『The Gold Demon』三卷(有楽社、明治三八年〜四二年)、徳富蘆花の『自然の人生』の英訳『Nature and Man』(夫人の Marie von Fallot および小野秀太郎との共訳、弘学館、大正二年)その他があげられる。ロイドはまた、英語・ギリシャ語・ラテン語のほか、サンスクリットに通じ、仏教を研究し、東洋の宗教を欧米に紹介した貢献が大きい。その方面での著作に『Higher Buddhism in the Light of the Nicene Creed』(発行所未詳、明治二六年)、『The Creed of Half Japan』(ロンドン、スミス・エルダー社、明治四四年)その他がある。そのほか、日本文化研究には『Admiral Togo』(金港堂、明治三六年)、『Everyday Japan』(ロンドン、カッセル社、明治四二年)などの著がある。

アーサー・ロイドが東京高等商業学校でどのような授業をし、また学生の英語会のためにどのような指導を行っていたかを知る上できわめて貴重な資料が残されている。ロイドの逝去一周忌を記念して、一つ橋会英語部が神田教授の校訂を得て『Doppo-shu and Dialogues, by the Late Prof. Arthur Lloyd, M. A.』(英語研究社、大正二年)を編集した。この書は二部からなり、第一部の“Translations”は、ロイドが逝去に先立つ一年間に和文英訳の教材として用いた模範翻訳である国木田独歩の短編四編の英訳と一つ橋会歌の英訳とを収め、第二部の“Dialogues”は、英語会大会での公演用台本として、ロイドが学生に書き与えた対話劇六編を収めている。

これによって、アーサー・ロイドが第二期の一つ橋英語教育に留めた足跡をすぐれた文学的遺産という理想的な形をなして如実に伝えている。

E・P・ルース (Ernest Percy Ruse) (一八五九—一九一六) は英国人で、明治三七年九月から大正二年七月までの九年間東京高等商業学校で英会話を教えた。活動的な教師で、学外で英語学習雑誌の編集を企てたり、自宅で夏期英語講習会を催したりした。著書に、小林行男との共著で『商業英作文練習書』(A Training in Business English for Advanced Students) (同文館、明治三八年) がある。

ヘンリー・ブレイ (Henry F. Bray) は英国人で、明治三九年一月から大正六年三月まで東京高等商業学校に在任しており、同時に明治四三年一月から大正四年八月まで東京大学法科にも出講している。本学では、「服装がスマートで、早口の英語を話し、コレスポンデンスを教えていた」という(須藤斎治氏談)。著書に、大正三年から六年にかけてのころ丸善から発行した Modern Commercial Readers, Commercial Composition and Correspondence などがある。

以上のほか、明治四四年に相次いで逝去した花輪・高島・ロイドの三教官のあとを埋めて、清田龍之助・舟橋雄・J・T・スウィフトの三教官が就任するが、これら三者のことは第三期の章で述べることとし、ここではなお、就任時期はそのあとになるが、在任期間の大半が高商時代に属しているジョン・アイルズのことを述べる。

ジョン・アイルズ (John Elles) は米国人で、ハーバード大学およびタフツ大学大学院を修了した。大正二年にE・P・ルースが満期解雇となると、そのあとを継いで、同年九月に就任した。神田教授の斡旋によるといわれる。大正十一年八月まで丸九年間在職したが、本校での授業の様子は、英会話の指導のテキストとした著書

A Trip to America (丸善、大正三年) からうかがえる。これは、副題に "In the form of exercises in English conversation" とあるところからも知られるように、アメリカの名所旧跡や文化施設などの紹介を A と B との二人の人物の交わす会話を通して行なう仕組になった教科書である。同時に、慣用的な生きたアメリカ口語を、必要に応じて適宜気の利いた俗語をまじえながら教えるように配慮された優雅な高級会話指導書である。ほかに、英国人 C・F・ステューヴンズ (C. F. Stephens) が大正六年四月から同八年九月まで東京高等商業学校の外国人教師として在職している。

- (1) 大塚高信「神田文典」、語学教育研究所編『隨筆集日本人と外国語』(開拓社、昭和四一年) 七八―九頁。
- (2) この節の記述には、特に町田俊昭『三代の辞書・英和英辞典百年小史』(三省堂、昭和四六年) によるところが大きい。

- (3) 『一橋大学創立七五周年記念論集』六四八―九頁。
- (4) 武田泰「齋藤秀三郎と仙台英語学校(3)」『英語青年』第一二五卷三号、昭和五四年五月号。
- (5) 大村喜吉「齋藤秀三郎」(吾妻書房、昭和三五年) 二二頁。
- (6) 古瀬良則「故山口教授を憶ふ」『英語青年』第六八卷六号、昭和七年二月一―五号。
- (7) 『国立・あの頃』(日本教育出版社、昭和四七年) 二六七頁。

### 三 第三期、東京商科大学時代(大正九年～昭和二十三年)

#### 一、一般情況

大正九年四月一日、一橋人多年の宿願がかなえられて、東京商科大学が成立した。本科三年予科三年(昭和一

八年からは二年)とし、ほかに商科専門部三年と商業教育養成所三年が設置された。当時の予科および本科の学科課程表を見ると、英語の一週についての授業時間数は、予科一年は十、同二・三年は各八であり、本科必修として一・二年商業英語各二、三年英語二、選択として毎学年英語三となっており、英語教育に対する重視のほどがうかがえる。

それと同時に、英語科の陣容も一段と強化された。高商から商大への昇格の時期を境にして大正七年から同十一年にかけて、浦口文治・阿久津謙二・五味赫・内藤三介・長岡擴・西村稠・渡部行三・牧一・A・C・タイズリッジ・古瀬良則・上條辰蔵のような、英語・英文学の本格的な専門家が登場し、一橋の英語教育に清新の気を漲らせた。そして、大正一二年末には神田乃武が世を去り、神田教授時代の築いた一橋英語の伝統が実質的にも新方向への進展を見る時代にはいることになる。大正一四年には西村稠が転出したが、入れ替わりに森野亀之助・会津常治・中村為治が見えて一段の拡充がなり、昭和三年から四年にかけては、退任する舟橋雄・浦口文治に入り替わって、新里文八郎・米本新次の名が見られるようになった。

これより先、大正一三年一〇月には、故神田乃武教授記念事業委員会が委員長福田徳三博士、編纂主任上田辰之助教授のもとに発足し、*Memorials of Naibu Kanda* を刊行した。この委員会の行なうたいま一つの事業で、一橋英語百年史にとって注目すべきは、本学にアングロ・サクソン文化を紹介することを目的として、「神田記念講座」を開設したことである。その第一回を担当したのは、当時東京帝国大学文学部の助教授であった斎藤勇(一八八七〜一九八二)である。斎藤勇講師は大正一五年四月から本科が一つ橋から国立へ移転する昭和六年三月までの五年間、一週二時間必修科目として英文学概論を講じた。斎藤勇博士の名著『思潮を中心とする英文学

史』は昭和二年に出版されているが、本学における講義内容はこの名著の粹をなすものであったことが想像される。一橋の英語教育が神田乃武時代に従来の実用主義の基の上に教養文化主義が積み上げられ、その時代の末期には舟橋雄・J・T・スウィフト・浦口文治のような英文学者がスタッフに加わるとともに、学術的な英文学研究の要素が深められてはいたが、ここにおいて、その方向への進行が本格的に開始されたのである。

斎藤勇博士が神田記念講座の任を果たしたのちは、新里文八郎が昭和六年度から昭和一三年度まで英文学講義を担当し、さらに昭和一四年度から昭和二五年度までは、上條辰蔵退任後に赴任した西川正身がアメリカ文学を講じた。このように神田記念講座として始められた英文学講義は第四期まで引き継がれ、それが新制度のもとで社会学部の文芸社会学講座に組み入れられて、今日に至っている。

つぎに、第三期における一橋会英語部の動静を眺めてみよう。関東大震災のあった明くる年の大正一三年四月に、石神井の仮校舎へ移転し、昭和八年七月までそこに居を定めた予科に予科語学部ができ、昭和二年四月から国立に移転した専門部に専門部語学部が設けられ、昭和五年七月まで神田一つ橋に留まった本科における一橋会英語部は新たに国際部と名乗った。以上の三部は、それぞれ独自に、英語劇・英語演説会・英語研究会などの活動を行なったが、恒例の年次大会は三部が合同して国際部の主催のもとに開催された。つぎに、『一橋五〇年史』三〇七頁から、大正一三年における大会の模様を報じる記事を引用する。一橋文化の担い手としての国際部が震災の禍から立ち直って間もないころに見せた意気軒昂な面目が想像されよう。

「大正一三年の語学大会は一月二日より三日間にわたって開催された。先に文部当局の学校劇禁止のお達しに、各大学専門学校はことごとく恒例の英語劇大会を中止して、秋の東部英語界は秋風落莫の感を抱かせた。

この中にあって、独りわが英語部ではこれをいわゆる浮華軽佻に流るる学生劇を禁止されたの意に取って、例年の通り、しかし脂粉、扮装を用いずに、ごく真摯に金ボタンで語学練習を行なう意味で開いた。出し物はダンセイニの「ロスト・シルクハット」(Dunsany: The Lost Silk Hat) およびシュニッツラーの「ラスト・マスクス」(Schizler: Die letzten Maskenの英訳)とスピーチであった。ことに「ラスト・マスクス」はかつて企てえなかった大陸物の英訳を実現したわけであった。練習期間の短かったにもかかわらず、非常な成功で、観衆も例年と異なり、真に聞いてくれる人が多く、満足にしかも禁令に触ることなく行なわれた。」

一橋国際部のその後の活動において特筆すべきことは、米国人教師J・T・スウィフトの辞任と入り替わるように、英国人教師で、のちに太平洋戦争終了後英国広報部長となったH・V・レッドマンが昭和二年に来日して、昭和八年まで本学の外国人教師を務め、国際部の学生には非常な情熱を傾けて英語劇演出の指導に当たったことである。A BRIDGE Vol II, No. 1 (1978) に寄せた古賀公三氏(昭和二年本科卒)の“Reminiscing about Sir H. Vere Redman”によれば、毎日の夕べに一〇名ないし一五名の学生を青山の自宅に招き、イギリスの劇作品の輪読会を開き、熱心で厳格な指導を行なったという。その刮目すべき成果が、昭和五年にY・W・C・A公公会堂において、一橋国際部がレッドマン教師指導のもとにショーの『セント・ジョーン』(G. B. Shaw: St Joan)を、東京在日婦人会のために公演し、その見事な演出により英米人の聴衆から大喝采を浴びたことである。

また、『一橋年譜I』の昭和七年四月二三日の項によれば、「日本シェイクスピア協会主催によって沙翁劇公演会が早大隈講堂において開催され、従来の翻訳劇のほかに英語劇が上演されることとなり、本学国際部がその

皮切りとして賛助出演、堂々の演技に満場を酔わしたという。

しかし、昭和一二年七月日中戦争が勃発するころには、一橋国際部の文化活動の上にも暗い時局の影響が及ぼされるようになった。『一橋年譜Ⅰ』の昭和一二年一月の項に「一橋英語向上のため英語劇を開催して語学の練磨を行っていた専門語学部は、時局に鑑み、この種の行事を取り止め、「一橋イングリッシュ」なる見出しの英文パンフレットを発行することとなる」という記事が見られる。ここにいう「一橋イングリッシュ」とは“HITOTSUBASHI”のことであり、先に引用した“A BRIDGE”の前身である<sup>(1)</sup>。

飛んで昭和二〇年八月、太平洋戦争が終結したのちには、一橋英語会の直系ともいべき専門部語学部も、しばしば英語劇を企画しながらこれを実現できず、代わりに読書会を開いて実力の回復を図るといふ事態に立ち至った。昭和二二年には、神田メダルスピーチ、中等スピーチ等の行事を復活せしめ、しかも世の英語流行の風潮に流されることもなく、堅実な部活動を再開したが、翌二三年には、読書会・会話練習等の部活動のほかは大規模な行事が不可能となり、ついに昭和二四年の学制改革ののち、同年一〇月に専門部語学部は、予科語学部ともども、国際部に吸収されることとなった。<sup>(2)</sup>

一方、英語科のスタッフも大きな変動の波に洗われた。昭和一六年から同一八年にかけて、本学の外国人教師および講師はいずれも退職し、商大時代の末期に、学内に外国人教師または講師が一人もいないという時期が出現した。それとほぼ時を同じくして、昭和一六年から同二二年にかけての戦中戦後の数年間に、長く商大英語科を支えてきた内藤三介・五味赫・渡部行三・中村為治・会津常治・牧一・森野亀之助・新里文八郎・小此木為二・阿久津謙二の諸教授が相次いで学校を去り、一橋英語教育の上にも大きな転換の痕跡を残すこととなった。

さらに、第四期にはいった昭和二六年には西川正身が東大へ転出した。独り、古瀬良則だけが、第三期を通じ、さらに第四期にわたって本学に留まり、新たに加わった山田和男・府川哲雄・佐々木高政・岩田一男・海老池俊治・青木雄造の諸教授とともに、新時代への任務継承の役を果たしている。

(1) 『一橋専門部教員養成所史』三三二頁。

(2) 『一橋専門部教員養成所史』三三二―三四頁。

## 二、教授陣容各個点描

第三期における英語科の教授のうち、まず第二期の末期、明治四四年に、花輪虎太郎、高島捨太、アーサー・ロイドの跡をそれぞれ継いで就任した清田龍之助・舟橋雄・J・T・スウィフトから叙述を始める。

清田せきた龍之助(一八八〇―一九四三)は東京に生まれ、立教大学を出てから、米国オハイオ州ケニオン大学とエール大学大学院を卒業し、明治四四年九月に東京高等商業学校講師に、大正二年二月に教授に就任した。学校が昇格した年の大正九年五月に一旦退職して浜口商事株式会社総支配人の任に就いた。しかし結局その事業が破綻し、一一年後の昭和六年四月に再び予科講師として商大に戻った。大正九年に佐野善作学長が清田教授の俊才を思い、その商大の教官をやめ実業界にはいることに非常な哀惜の意を洩らしたという(古瀬良則氏談)。再就任後は昭和十三年二月まで七年間在職して商業英語を教えていたが、すぐそのあと、オーストラリア政府の要請により外務省の推薦を受けて渡豪し、ブリズベン大学で日本文明講座を開講した。初めの退官前、教室では英作文や英文講読を担当したが、「足にスパットを着けるといった派手な服装をし、アメリカ式の立派な発音の英語を話しておられた」と須藤斎治氏が、「コナン・ドイルの *The Exploits of Brigadier Gerard* を教えて

おられた」と村松恒一郎氏が述べている。

舟橋雄たけし（一八七三〜一九五四）は東京出身で、東京英和学校（青山学院の前身）を出て、米國ミシガン州アルビオン大学およびニューヨーク州シラキューズ大学で英文学と美術史を修め、帰国後は母校の青山学院高等科（青山女学院の前身）に教えていたが、神田乃武の知遇を得て、明治四四年九月に東京高等商業学校の講師となり、大正二年二月に教授に昇進した。この講師就任と教授昇進は清田龍之助と同時であった。それ以来、昭和三年三月、京都同志社大学英文科学主任としての赴任を請われて本学を去るまで、一六年余りの間、本学における英語英文学の教育に当たった。特に、一橋英語に初めて学究的英文学研究の新風を鼓吹した学者として注目されるべきである。早く、東京高商に就任した明治四四年には、わが国の総合的英文学史の草分けともいふべき『英文学史大観』（青山学院）を著わし、大正一二年には『現代英米の文学』（明誠館、再版、文川堂、明治三年）の著がある。後者は当時としては新しい英米作家と作品を最初に解説した著述として英米文学研究史上高く評価されている。教室での授業振りについて、須藤斎治氏が「英語の発音が柔か味があつて快かつた。学生にテキストを訳させるときには、自由に学生の意見を採り入れて指導するといふところがあつた」と語っている。昭和三年三月に東京商科大学を去つてからは、同志社大学に一年間専任教授として勤務し、昭和二年には駒沢大学に迎えられたが、本学退職以後の著述に、Whitman: Leaves of Grass（注解）（研究社、昭和三年）、The Bible（注解）（研究社、昭和六年）、『イギリス散文文体の発達』（新英米文学社、昭和八年）、『中世文化』（研究社、昭和一六年）、『アメリカ文学入門』（吉川弘文館、昭和二五年）その他がある。

J・T・スウィフト（John Trumbull Swift）（一八六一〜一九二八）は米國コネティカット州に生まれ、エー

ル大学およびコロンビア大学に学んだのち、初めY M C A教師団の一人として来日し、明治二二年に日本Y M C Aを創設して、その名譽主事としてY M C A運動に尽くした。その後一旦帰米し、再度来日してからは、東京高師の教師となり、東京大学文学部の講師を勤めたが、東京高商には、アーサー・ロイドの後任として、明治四五年一月に外国人講師の任に就き、大正三年五月に外国人教師になり、それ以来商大時代の昭和三年六月に解雇になるまで、一六年間本学で英語を教えた。重厚で君子風の人格者であり、テニスンなどによる英詩に詳しく、教室ではテニスンの Enoch Arden や Morte Darthur などを、作詩法を説きながら講義した。大正一五年度の商大本科の講義要項には、スウィフトの担当講義として、第三学年毎週二時間必修として、“Tennyson's poetical works as illustrating the principles of English poetical composition, with exercise in class to improve the student's voice tones in reading English poetry with expression”と記されている。明治四五年以後には、ロイドの後任として、神田教授らとともに文検および高検の試験委員を務めた。また、大正一三年の北米移民法問題が起こったころには、日米協会の機関雑誌 American Japan の主筆を務めるなど、ジャーナリストとしても活躍し、日米親善に尽くした。

つぎに、第三期に東京商科大学に就任したその他の教授についての叙述に移る。

上田辰之助(一八九二〜一九五六)は東京日本橋に生まれ、明治四三年に東京府立一中を卒業しているが、すでに府立一中時代に七年先輩の市河三喜(一八八六〜一九七〇)とともに英語の二天才といわれた。<sup>(1)</sup> 中学を卒業した年に東京高等商業学校に入学し、大正五年三月同校専攻部を修了するまで、経済学・社会思想史を専攻するかたわら、親しく神田教授の指導と薫陶を受け、性来の語学的才に一段の磨きをかけられた。高商在学中のこと

につき、同じく大正三年に本科を卒業した泰山会会員諸氏は、「語学が天才的によくできたばかりでなく、またよく勉強もした。英語辞典がみな真っ黒になるまで引きこなししていた。英語会の出し物として、フランス語の劇を自分で英訳したことがあった。山口鋺太先生などは上田君に英語の発音を正され、上田君には一目置いていた」と語っている。大正五年三月専攻部を修了するとともに、母校の講師を嘱託され、大正六年一月教授となると同時に、米・英・仏へ六年間留学を命ぜられた。その後、商大時代を經由して、昭和三〇年三月に停年退職するまで、西洋経済事情・経済政策などのほか、英米文化論や商業英語の講義を担当している。

上田教授の社会学者ないし経済学者としての研究業績などについての記述は、専門分野の担当者に委ねるとして、ここでは、その天才的語学者としての実力とその上に築かれた英米文化研究に対する識見について、なお述べてみたい。上田教授が生来の機智とユーモアを交えて、英語その他の外国語を自在に使いこなしたとは、今日までも語り草になっているが、その書く英語の精練された見事さは、恩師神田乃武の追悼刊行書 *Memorials of Naibu Kanda* の冒頭に収めた、上田教授自身の筆になる達意で格調の高い英文の評伝“*Naibu Kanda, 1857-1923*”によってだけでも十分にうかがわれよう。

上田辰之助博士の英文学に関する学識は、『蜂の寓話—自由主義経済の根底にあるもの—』（新紀元社、昭和二五年）というきわめて異色に富む著書に具象されている。これはバーナード・マンドヴィル (*Bernard de Mandeville*) 作の散文の補論を添えた風刺詩 *The Fable of the Bees* (一七二三年版) の原文およびその翻訳と、この作品のもつイギリスの経済発展史的意味を考察したマンドヴィル論とからなっている。この著や英文論説“*Mr. Spectator as an Economist*” (*The Annals of the Hitotsubashi Academy* 第三卷一号、昭和七二年、

所載)その他の諸論説からうかがわれるように、上田博士の目指すものは英文学を通してイギリスの経済思想を究明することであった。英語英文学に対するこのような研究態度こそ、実学本位から脱皮して、文化教養を主旨とする方向へ発展し来たった一橋英語の伝統的特質を象徴している。また、上田博士自身この方向へ、特に社会科学的不いし比較文化的視野に立った英文学研究の方向へのいっそうの発展を折に触れて主張した。

木村重治(一八七四—一九六七)は奈良県天理に生まれ、米国ニューヨーク州ハーバート大学およびハーバード大学大学院で英文学・キリスト教会史・欧州中世史を修め、帰国後は立教中学校・慶応義塾・山口高商に教えてから、大正六年四月東京高商に赴任し、大正一二年四月長崎高商校長として転出するまで、英語および近世史を教えた。早くから洗礼を受けているクリスチャンであるが、英語教育についても円満で正統的な見識をもっていった。ご長男木村重義氏の語るところによれば、山口高商時代から東京商大時代にかけて、エドワード・ガーンレットと親しくし、また、阿久津謙二教授を山口高商および東京商大の就任の時とも、その都度自分のあとに推薦したという。大正一〇年八月から同一〇年四月にかけての欧米留学の折に、イギリスでハロルド・パーマーと会い、この語学教育家を日本へ招聘させる糸口を作ったともいう。このことは一般に知られていないが、日本の英語教育史上記されるべき事柄であろう。なお、商大退任後は長崎高商校長・立教大学商学部長および同大学長・ハワイ大学教授・啓明学園園長・国際キリスト教大学監事・東京女学館短大講師等を歴任して、昭和四二年七月一八日、九三歳の長寿を全うして昇天している。

浦口文治(一八七二—一九四四)は兵庫県出身で、同志社(普通学校)を卒業後、明治三〇年に文検に合格し、母校同志社英文科教授に就任中に、大正二年から二年間渡米して、ハーバード大学英文科でシェイクスピア

学者として著名な G・L・キアレッジ (George Lyman Kittredge) の教えを受けて M. A. の学位を取得した。大正七年四月、神田乃武に引かれて、東京高等商業学校の講師を嘱託され、翌八年二月教授となって、昭和四年四月まで本学に留まった。英文学者としてシェイクスピアやラスキンの研究者としての令名を高め、早く明治三九年に対訳評注『英詩の栞』(英学新報社)を著わし、商大就任中には、大正一四年に『ジャン・ラスキン』(同文館)を、商大退職後には、昭和七年に『新評注ハムレット』(三省堂)を、昭和九年に『新訳ハムレット』(三省堂)をそれぞれ発行した。また、昭和一〇年にシェイクスピア生誕三七〇年を記念して、私費で『浦ロシエイクスピア・パンフレット』を刊行し、それを希望者に無料で頒布した。

浦口教授の英文学者としての業績と並んで特記すべきことは、英語教育家として、みずから「グループ・メソッド」と称する徹底した英文の直読直解式教授法を考案し、『グループ・メソッド—外国文学研究の近道』(文化生活研究会、昭和二年)、『グループ式訳し方』(同文館、昭和七年)の著述によって熱心にこれを唱導して、当時の英語教育会に賛否両論を捲き起こした。商大在任中にも、授業にこの“group method”を實踐し、「たとえば、聖書のマタイ伝六章三四節の Sufficient unto the day is the evil thereof. を『一日の苦勞は一日にて足れり』ではなく、『足れり、その日の苦勞やそれぞ』と訳せと教えた」(村松恒一郎氏談)。また、国立バイオニア会昭和三年組の阿片久五郎氏はつぎのように語っている。「印象に残っているのはエブリマンズ・ライブラリ版のジャン・ラスキンの Unto This Last を講せられた浦口文治教授のことである。……その一章の文章 The function of the merchant is to provide the goods for the nation. を『職能として商人が供給する物資の相手方は国民である』と訳すことを教えた『グループ・メソッド』すなわち……頭から読んだ通りに訳す方法は、

当時の学生には全く難物であった。」<sup>(2)</sup> 一方また実務英語作文を教えてもおり、早いころの著書に『実務社交現用英語』(北文館、五版、大正九年)がある。商大退官後は、立教大学その他で英文学を講じていたが、昭和一九年三月八日、七一歳で歿した。特異な風格と気骨を備えた学者であった。

エドワード・ガントレット (George Edward Luckman Gauntlett) (一八六八〜一九五六) は英国人で、明治二二年二六歳の折に來日し、翌二四年三月から一年間、高等商業学校に外国人講師として務め、その間にのちの商大学長佐野善作を教えた。その後、六高・四高・山口高商等の講師を経て、大正五年八月に昔の教え子だった佐野学長に招かれて、東京高等商業学校に再任し、以後昭和一〇年三月まで本学で英会話等を教えた。「英語の時間で最も楽しく教わったのはガントレット先生の時間であった。二〇の扉のような英会話に親しむことができた」と尾崎六郎氏(大正一三年専門部卒)が語っている。<sup>(3)</sup> また、ガントレットについて有名なことは、幅広で先が二つに割れるガントレット式ペンを使用し、自作の英習字帳による英習字を指導したことと、速記やタイプライティングの授業を担当したことである。熱心なクリスチャンで、早くからエスペラント語を研究し、五〇年間にわたってその普及宣伝に尽くした。<sup>(4)</sup> 夫人は音楽家山田耕作の姉で、ガントレット自身も商大解雇後の昭和一六年には帰化して「岸登烈」と名乗った。

阿久津謙二(一八八三〜一九六五)は栃木県出身で、米国ミネソタ大学で法学を修め、大正八年九月、神田乃武の推薦により、山口高商から転出して東京高商の英語担当教授として就任し、翌大正九年四月から東京商大予科および専門部に二四年間教授を勤め、昭和一九年三月に退職したのちにもなお三年間専門部の嘱託講師として留まった。その間、英語を教えるかたわら予科学生主事および予科主事という要職に当たり、学生の補導と大

学の監理のために尽くした。古瀬良則氏は「学生主事として自分の前任者だったが、法学者らしく考え方が緻密で厳格であり、人格者だった」と語り、佐々木高政氏は「洒脱ながら重厚、思いやりが篤いが、教育にはこの上もなく厳しい」と述べている<sup>(5)</sup>。大正九年度の講義科目表によると、阿久津教授が使用した教科書に「Half Hour with Modern Writers (予科一年)」、「Selection from Seven Great Writers in Current English Literature (予科二年)」、「Select Pieces of Eminent Authors (教員養成科一年)」が見られ、文学作品の講読を担当したことが知られる。阿久津教授の英語について、渡辺均氏は「アメリカの大学仕込みの法科出身らしく、綺麗なきちんとした英語を話された」と語っている。著書に『最新英米略語辞典』(一橋書房、昭和二八年)その他がある。本学退官後は中央大学に八〇歳の時まで出講していた。

移川子之蔵<sup>うつしかわね</sup>(一八八四〜一九四七)は福島県二本松に生まれ、米国シカゴ大学卒業後、ハーバード大学大学院

で人類学を専攻して Ph. D. の学位を取得し、大正八月九月に東京高商の嘱託講師に、翌九年四月に東京商大予科講師になり、翌一〇年九月以後、専門部および予科の教授として大正一五年三月まで在任し、近世史と英語を担当した。「人類学者として世界的に知られた人であり、もともと人類学か考古学かの講義を担当するために赴任した。しかしその講義が実現しなかったため、止むを得ず英語のスタッフの一人に加わってもらうことになった。実に心の優しい常ににこにこ笑顔を絶やさぬ好人物であった」と古瀬良則氏が語っている。大正一五年に本学から台湾総督府高等学校に転じ、のち台北帝国大学教授として土俗学と人種学の講座を担当した。

長岡擴<sup>ひろゆき</sup>(一八七八〜一九三〇)は福岡県柳川に生まれ、京都同志社高等科第三学年を中途退学し、明治三八年、岩手県盛岡私立商業学校教諭に在職中に文棟に合格した。それが機縁となって神田乃武の知遇を得、大正三

年、東京区立大倉商業学校に在職中に、三省堂から *English Grammar* (改訂版) を神田乃武と共編で発行した。それ以後、「クラウン・リーダー」その他のリーダー・文法・作文に及ぶ神田乃武編の英語教科書に共編者として名を連ねることが多く、また名を連ねない場合でも、実質的な執筆校正の仕事を、逝去する年の昭和五年まで、一四、五年にわたって続行した。さらには、その間に「コンサイス英和」などの辞典編纂の仕事にたずさわり、文字通り神田乃武の片腕となって、わが国の英語教育界のために尽瘁した。東京商科大学にも、神田乃武の推挙によって、大正九年四月に就任し、以後昭和五年までの一〇年間本学の教授を務めた。

長岡教授は教科書や辞典の編纂の仕事を手速く能率的にしおこせる実践型の英語教師であったばかりではなく、またすぐれた英文学者であり、平素からハーディ・ステイヴンソン・メデレス等を愛読し、特にハーディについては、啓蒙的ではあるが本格的な研究の一端が「ハーディの『ウェセックス』小説」(『一橋新聞』昭和三年二月六日号)として発表されている。(なお、この論説は追憶・遺稿編『長岡教授の面影』の二二四—二二七頁に収録されている。)さらに晩年には、イギリスの文化一般の究明を目指した英文学研究に関心を寄せており、その成果が逝去した年(昭和五年)に刀江書房から出版された訳書、アンドレ・モロア著『ヂスレリ伝』である。これは、*André Maurois* が一九二七年に著わし、新伝記文学として洛陽の紙価を高からしめた *La Vie de Disraeli* をフランス語の原書から、しかも発刊後きわめて短い期間内に翻訳し上げたもので、達意で雄勁な日本文による訳業として好評を博した。

長岡教授には、大正一四年二月から二年間に及ぶイギリス留学中での英文による著書に『*English Commercial Correspondence, Economics of the Import and Export* (ハムにロンドン、ジョットマン社、昭和二年)と』

う商業英語に関するものがあり、商大でも昭和二年から三年間本科で商業英語を講じた。これについては、上田辰之助教授が『長岡教授の面影』三九頁に、長岡教授が大正一四年からの二箇年海外留学を許されたのは、佐野学長が長岡教授の学才を認め、純語学畑の同教授を商業学方面に起用しようとした結果であると述べ、つぎのように続けている。「正直にいうと、商業は同氏の愛好題目ではなかった。英文学はその血となり肉となっていたが、商業は手の通りにくい借衣であった。それにもかかわらず、教授の職業に対する猷身の精進は立派にこの難関を突破し、商業英語の克服に輝かしき実績を挙げたのだ。私どもはこの良心と努力とに対して、おのずから襟を正さざるを得ない。」

教室における長岡教授の講義はその教育的熱意によってよく学生を心服せしめ、常に好評を博していたとい(6)う。また、きわめて友情に厚く、私財を投げ打っても、よく同僚後輩の世話をし、多くの人々の信頼と尊敬を集めた。上記のイギリス留学中に、当時ロンドン語学校の教師をしていたヴィア・レッドマンと親しくなり、帰国後佐野学長に推薦して、同人の商大赴任を実現させるのに骨折ったという(古瀬良則氏談)。

これほどの稀に見る学徳のすぐれた人格者であったが、昭和五年七月一日、まだ五二歳にも満たぬ壮年期に、不幸にも胆石病に腹膜炎を併発して他界した。単に一橋にとつてばかりではなく、広く日本の英語英文学界にとつても、実に惜しむべきことであった。

五味赫(おと)(一八八〇〜一九四七)は東京府の士族の家に生まれ、郵便電信学校卒業後、国民英学会および正則英語学校に学んだ。通信省欧文係として勤務するかたわら、昭和四一年の文検を受験して一度で一位で合格し、その後早稲田実業学校・横浜専門学校等で英語を教えながら、大正九年には、第一回高検にこれまた上成績で合格

し、同じ年の四月に神田乃武に推薦されて、東京商科大学予科兼専門部の教授に就任し、昭和一八年三月に退官している。英語ばかりではなく、ドイツ語もフランス語も達者な語学の天才であり、特に英作文が得意で、商大就任以前に、英語雑誌『英語青年』の和文英訳欄を武信由太郎（一八六三〜一九三〇）とともに九一〇年間担当していた。商大では、大正一三年以後は専門部と教員養成所を教えていたが、教室で生粋の江戸っ子振りを縦横に發揮し、「妙な駄じゃれを飛ばして笑わせることの好きだった……。たとえば、山はさんさん、木はぼくぼくとして繁り、水はすすい、すすいとして流れる、といった具合」であった（松尾弘氏、国立バイオニア会、昭和四年組<sup>7)</sup>）。商大退官後は、放送局や大蔵省に務めて翻訳の業に当たっていた。

内藤三介（一八七五〜一九六七）は東京に生まれ、東京専門学校（早稲田大学の前身）の英語政治科を卒業後、明治四〇年に文検に合格してから、渡米してエール大学および同大学院を卒業した。その後、石川県金沢第一中学校や国民英学会で教鞭を執ったが、大正九年施行の第一回高検に合格し、同年三月に商大専門部兼予科教授として就任して、昭和一六年三月まで在職した。「性誠に誠実で親切心の厚い紳士であり、英米の伝記作品を愛読し、高学年組にはジョージ・エリオットの *Silas Marner* や *Adam Bede* を教えていた」と古瀬良則氏が語り、「真面目そのものであるのに惚れこんで、課外勉強に参加したのはよいが、サッカーの *Vanity Fair* を第一巻、第二巻ともに全部読まされた」と松尾弘氏（国立バイオニア会、昭和四年組）が述べている<sup>8)</sup>。著書に *Essentials of Translation from Japanese into English*（慶文堂、大正一四年）があるが、これは和文英訳の参考書でありながら、「注解は普通の文法書にない微細なイディオム・修辭法を指示し、辞典にない運用の実例をあげている。…要所要所に挿話を入れて、英語全般に関する予備知識・風物制度に関する知識を与えることに

注意している」(『英語青年』第五四卷三号、大正一四年一月一日号、「寄贈の新刊書」といった、よく著者の人柄と学殖を具象した懇切な指導書である。商大退官後は早稲田大学や千葉商大の教授を務めたが、昭和四二年八月一日、九二歳に一八日だけ満たないという長寿を全うして永眠している。ご長男内藤信介氏からの私信に、「父は死亡する直前まで年の割に非常に元気で：毎日英文の勉強はもちろん、九〇歳を過ぎてから論語の再読に励んでおり、私なども驚いた次第でした。：酒・煙草を嗜まず、英語一筋しか世間を知らぬ父でした。：」とある。

西村稠(しげ)(一八八六～一九六六)は島根県津和野に生まれ、国民英学会と東京外国語学校英語専修科を卒業後、明治四〇年に内藤三介とともに文検に合格した。その後諸地の中学校の教諭を務め、大正九年に第一回高検に、これまた内藤三介と、それから五味赫といっしょに合格したが、西村稠は首席であった。同年八月、神田乃武に推挙があつて商大の教授となり、大正一四年三月に横浜高商が設立されると、その英語科主任教授として転出している。このように、商大への就任は五年に留まり、その学界および英語教育界への偉大な功績の多くは商大退職後の時期にあげられている。横浜高商では終始口頭で英語の講義を行ない、大いに生きた英語教育の効果を納めた。昭和一〇年には英語教授研究所の理事に就任し、英語の口頭訓練を重視する新教授法の高等程度学校への適用を唱え、それを実践した。一方、大正一三年に創刊された英語雑誌 *The Current of the World* (英語通信社発行)の主筆今井信之(一八八四～一九五四)に協力し、同誌の編集にたずさわったころに始まって、芭蕉の『奥の細道』、杉田玄白の『解体新書』『蘭学事始』などの英訳を發表した。昭和二五年に、豊田実(一八八五～一九七二)に推薦されて、青山学院大学教授に就任したのちには、これらの日本文学作品を教材として、英文の指導を行なった。特に、和歌・俳句・漢詩の英訳にすぐれ、多くの訳業を遂行し、昭和二八年には万葉歌人

や近代詩人の作を英訳した詞華集 *Green Hill Poems* を北星堂から出版している。

渡部行三(一八八二〜一九七五)は、三重県出身で、東京高師英語部を卒業後、大阪府・鹿児島県・佐賀県の中学校の教諭を務めたのち、山口県岩国中学校在職中に、大正一〇年に第二回高検に、古瀬良則とともに合格した。同年四月に東京商科大学予科講師に就任し、翌大正一〇年三月に教授に昇任して、昭和一八年二月まで専任として英語を教えたが、なお翌一九一九年三月まで非常勤講師として留まった。性きわめて穩健円満な人格者であり、教室では実用英語・英作文から英文文学作品講読に至るまで万遍のない英語教育に努めた。「エッセイの講読を習ったが、真面目な厳格な先生だった」と市原昌三郎氏が語っている。昭和四年三月から二箇年英国へ留学を命じられたが、ご令息渡部正行氏は、「父は生真面目な人だったので、ともかく与えられた二箇年の外遊期間をできるだけ有効に過ごそうとして、イギリスからフランス・ドイツへ渡って行く間も、費用を余裕のあるだけ全部書物を買ひ集めることと観劇に使い果たしたようです」と述べている。商大退職後は十数年外務省の翻訳官と外交官講習所の講師を務めたが、その後も健康な読書生活を続け、奇しくも一橋大学が創立一〇〇年を迎えた昭和五〇年の七月三〇日、満九二歳の長寿を全うして長逝している。

牧一(一八八四〜一九七二)は茨城県下館に生まれ、広島高師英語部を卒業したのち、米国イリノイ州立大学やコロンビア大学大学院で修学し、帰国後二年間母校の広島高師に勤務してから、大正一〇年四月に東京商科大学の教授となり、以来昭和二〇年三月に依願退職するまでの二四年間、専門部と予科で英語を教えた。昭和一年からは小平の予科の授業を担当したが、そのかたわら予科語学会の指導教官の任を務めた。そのころ教室では「ラスキンの *Sesame and Lilies* を教えた」といふ(菅順一氏談)。士族の知らしくその風格に古武士

の面影を留め、講義が演説口調で、声が大きく、入学試験で書取りを読み上げた時に、その英語が隣室までよく聞こえたといわれる。編著書に『英語単語の意味と英文の解釈』(Studies in English Semantics) (敬文堂、大正一四年)、フランク・リーとの共編『和英会話辞典』(有朋堂、大正一五年)、ロレンス・フォーセットとの共著『英語重要単語の統計的研究』(A Study of English Word-Values Statistically Determined from the Latest Extensive Word-Counts) (松邑三松堂、昭和七年)、ロレンス・フォーセット、トマス・フォーセットとの共編『標準英語文法作文辞典』(Complete Pocket Guide to Standard Handbook) (松邑三松堂、昭和八年)。改訂版、篠崎書林、昭和五年)その他がある。このうち、『英語重要単語の統計的研究』はこの種の研究としてすでに発表されているソーンダイク(E. L. Thorndike)とホーン(Ernest Horn)の語彙を、客観的調査法によって修正総合して、新たに一、五三四語を選定したもので、わが国における英語教育史上貴重な研究成果として評価されている<sup>(9)</sup>。上にあげたその他の三書は、いずれも内容が充実し、懇切周到な配慮が行き届いて、独得な実用価値を備えた学習指導書である点に特徴がある。なお、牧教授は、学外にあって、昭和一〇年度から約一〇年間文検の試験委員を務めた。商大退官後は、共立女子大学に逝去の年の前年昭和四五年の三月まで専任教授として勤務した。

A・C・タイズリッジ(Alan Courtney Tytheridge) (一八九〇〜一九五二)はイギリスに生まれ、ニュージールランド大学を出た人で、商大には大正八年に外国人講師として就任し、大正一三年八月に一旦解雇されるが、昭和四年四月から一三年間、予科の外国人講師として再び就任した。地味で寡黙な、いかにもイギリス人らしい教師であった。日本に長く在住し、一生独身で通した。商大を辞任したのは津田英語会に出講していた。

古瀬良則（一八九三～一九八〇）は長崎県に生まれ、東京外国語学校英語科を特待生として卒業し、石川県金沢一中に在職中に、大正一〇年度の第二回高検を受験し、最年少最首席で合格した。同年四月に東京商科大学予科講師となり、翌大正一一年に教授に昇進し、以後商大時代末まで、主として予科での英語の授業を担当した。その後一橋大学時代にはいり、昭和三二年三月に停年退官するまで経済学部配属の教授を務め、なお同年九月まで非常勤講師として留まった。商大時代には、昭和七年三月から九年四月まで予科の学生主事を務め、学生の適正な教育補導に尽力した。

古瀬教授は、英語英文学に対する堅実な学識の上に、絶えざる読書によって思索研修を積み重ねると同時に、実用と教養の一体化を主旨とする英語教育を三六年間実践し通した。古瀬教授の読書遍歴は、教授が還歴を迎えた昭和二八年の九月に『小平学報』第一〇号に寄せた感想文「矛盾を悟る」によってもうかがうことができるように、トマス・カーライル、ジョン・スチュアート・ミル、トマス・ハーディ、バーナード・ショー、ジョン・ゴールズワージー、オールダス・ハックスレーその他の莫大な量の作品を倦むことなく読み続け、思索し続けたものである。このように堅実な英文学研究者であると同時に、語学教育に対しても豊富な学殖に裏付けられた健全な見識をもっており、著書の『英文法の研究』（旺文社、昭和二五年）にその現われの一端を見ることができ

る。

一橋大学時代にはいって、その健全でしかも温情のある人徳をもって、陰に陽に後進の同僚を指導鞭撻し、英語科スタッフの親和を図った。本学退官後は昭和四七年三月まで東京経済大学に出講しており、その後閑居して読書三昧の生活を送っていたが、昭和五五年七月七日八六歳で逝去した。

トレヴァー・ジョンズ (Trevor Jones) (一八八五〜一九五七) はイギリスに生まれ、マンチェスター大学を卒業して商学修士号を取得し、さらにロンドン経済専門学校で学んだ。来日後直ちに小樽高商の外国人教師となり、その誠実で教育熱心な人柄が同僚の敬愛を集めていたが、大正十一年一月に東京商科大学に転出し、昭和十一年三月で満期解雇となるまで、一四年間本学で商業英語および商業実践を担当した。その後は早稲田大学および日本女子専門学校で英語英文学を教えた。小樽高商時代に、大正五年一月から同七年七月までにかけて苦米地英俊との共訳で夏目漱石作『二百十日』の英訳を『英語青年』に発表している。その後の著書に、『Colloquial English (瞭文堂 大正七年)』、『Foreign Trade and Exchange (敬文堂 大正十三年)』、『Economic Theory and Practice (ロンドン、P. S. キング社、大正十五年)』その他がある。

チャールズ・アーネル (Charles Jonathan Arnell) (一八八〇〜一九二四) は東京商科大学専門部の外国人講師として、大正十一年九月から同十三年八月までわずか二年間だけ在職していたにすぎない米国人であるが、ここに特に取り上げておくに価する人である。生まれはスウェーデンであるが、一〇代の時に両親に伴われて米国に渡り、二〇歳の折に米国人に帰化した。シアトルのワシントン大学を出て、外交官試験に合格し、明治四三年に来日して、アメリカ大使官に参事官、のちに顧問として勤務した。その間に日本文学の研究を志して東京大学文学部国文学科に入学し、大正一二年その大学院課程を修了した。商大専門部で英会話を教えたのは東大国文学科大学院に在籍中の時であったが、日本語に堪能なこともあり、学生に親しまれた。ご令息喜代田薫氏からの私信によれば、「学生間のニックネームは『おやじ』でした。夏休みには学生たちがよく自宅に来られたことを記憶しております」とある。

しかし、この純粹な親日家は、大正一三年五月、米國に排日移民法が成立し、日米問題が險惡化したとき、米國の態度を憤慨するあまり、怏々とした日を送るうちに遂に強度の精神病に陥り、故國に送還され、タコマ脳病院に入院中に、同年一月八日死亡した。行年わずかに四四であった。当時専門部の学生たちがこの不幸な米國教師に深く同情し、日本人である夫人と二児のために義捐金を募集するという美挙のあったことが、『一橋五〇年史』二九五―六頁に報ぜられている。

上條辰蔵（一八八〇―一九三九）は長野県に生まれ、明治三四年に東京外國語學校を第二期生として、神田乃武の指導を受けて卒業し、直ちに母校の助教となつたが、明治四一年から東京高等師範學校および同付属學校の講師に、翌四二年には東京高師の教授となつた。高師時代にはその學徳により学生の敬慕の的となつたが、大正一二年三月、神田乃武に推薦されて、東京商科大学の教授として轉じた。商大は昭和八年九月に退職し、さらに半年ほど非常勤講師として留まつた。高師に一五年、商大に一〇年在職したことになるが、その間、語學文學兩分野の蘊奥をきわめ、かつ教育に熱心で、わが國における英語界の指導者の地位を占めた。特に話す英語が流暢で、英作文に堪能であつた。授業が早口なのが有名で、時間内にテキストに関する語學的な知識をできるだけ多量に學生に教えてやろうといふところが見られた。業績としては、古く、訳注「キーツの『ギリシヤ古瓶賦』(Ode on a Grecian Urn)」(『やまびこ』明治三五―七七年号所載)、Dickens's Pickwick Papers (五章までの詳解) (上田屋書店、明治三六年)、『文典応用英文の組立』(博文館、昭和四四年)等に始まり、のち教科書や講義録の類を執筆することが多かつた。商大では、昭和三年に舟橋雄が退職したあと、代わつて予科の英語科主任を務めたが、そのころの上條教授のことを、新里文八郎教授がつぎのように語っている。「先生は：詩の心をも

っておられて、教場でも自作のソネットを示されたことがあるそうだし、英語会の雑誌にも二、三度詩をお与えになったことがある。いつか自分は文法作文のほうの専門家というふうに思われているようだが、退官の時にはゆっくりと今までの経験などを材料として、まとまった研究をしたいと言っておられた。…先生は趣味として謡曲をなされていたようで、石神井で牧一教授などと練習をされ、一度は如水会の宝生会に出演されたそうである。<sup>(10)</sup>学外では、昭和五年から八年まで文検試験委員を務めた。頑健な風貌の人であったが、昭和一四年二月九日、法政大学に在職中に脳溢血で逝去した。行年五八であった。

小此木為二(一八八三～一九六二)は東京に生まれ、明治二八年東京高等商業学校を卒業し、その後米国、マレー半島および台湾に渡って実業に従事し、台湾高校の教授を経て、大正一三年四月、東京商科大学専門部教授となり、昭和一八年二月に依願退職したが、その後もお二一年三月まで講師を嘱託されている。その間二二年母校で商業英語を教えた。かたわら、昭和二年から六年まで専門部の生徒監と学生主事の任に当たった。学外では、上田辰之助教授とともに、長く商業英語科教員検定試験委員を務めた。「よき意味での一橋紳士の標本という印象」だったと、佐々木高政氏が「あの頃のこと」(『一橋論叢』昭和四四年一月号)で述べている。

森野亀之助(一八九六～一九四六)は岐阜県高山市の出身で、大正一〇年に東京大学文学部英文学科を出、広島高等師範学校の講師を務めたのち、大正一四年三月に東京商科大学予科教授に就任した。帝国大学令改正により東京大学の文科大学が学部編成に組織替えされたのが大正八年であるから、東大文学部英文科出身で本学の英語教官として就任したのが、森野教授をもって第一号ということになる。「温厚でおしやれな人だった」と西川正身氏が言い、「商大にはいって最初の英語の時間に森野先生に当てられたので、特に印象に残っている。ギッ

シングの *The Private Papers of Henry Ryecroft* を教わった。早口でとつとつとした調子で講義をされた」と横山健之輔氏が語っている。昭和二〇年一〇月に商大を退職し、郷里の高山市に引き上げたが、その後二年余りを経た昭和二十三年三月二一日、五一歳の若さで病歿している。

F・H・リー (Frank Herbert Lee) (一八六九—一九五七) は英国人でオックスフォード大学を出、来日して海軍兵学校で英語を教えたのち、大正一四年四月東京商科大学の外国人教師となり、昭和一二年三月に満期解雇となるまで、一二年間予科と専門部で教鞭を執った。その間に、学習院や東大英文科にも出講した。「皮肉なところのあるおじいさんで、ガーンレットさんとは違って、教えっ放しと聞いた感じだった。"On the road to Mandalay" を歌って聞かせてくださったことがあった」と木下光雄氏が語っている。編著書に、牧一との共編『和英会話辞典』(有朋堂、大正一五年)、『The English Country-Calendar』(北星堂、昭和二年)、『A London Chronicle』(北星堂、昭和三年)、『Practical English Conversation』(北星堂、昭和四年)、『Days and Years in Japan』(北星堂、昭和一〇年)、『O. Umetani no 共著 English As We Speak It』(丸善、昭和一八年)などがある。

会津常治(おと) (一八八二—一九六〇) は長野県出身で、明治四一年に東京高等師範学校英語科を、大正七年にオックスフォード大学マンチェスターカレッジを卒業し、早稲田大学高等学院教授を経て、大正一五年四月に東京商科大学の講師に就任し、昭和二年六月に教授となった。昭和八年四月から専門部の専任教授となり、昭和一八年二月に依願退職したが、なおその後も一九年三月まで専門部の講師を嘱託された。専門部における会津教授について、佐々木高政氏が上記「あの頃のこと」の中で、「朴訥と誠実さを両足として歩いておられた感じ」である

と述べている。ご令息会津洋氏からの私信にも、「父は教壇の仕事が第一と考え、著述をしない建前だった」とある。商大退職後は、東北学院、東洋英和女学院、青山学院、および国立音楽大学に出講した。

中村為治（一八九八〜）は東京に生まれ、東京高師付属中学校および一高を経て、東京大学文学部英文学科に学んで、卒業後甲府中学校を一学期間教えたあと、市河三喜博士の斡旋を得て、関西学院に二年七箇月在職し、またそのあと、大正一五年四月に東京商科大学教授に就任した。初め専門部を教えたが、昭和六年一月からは予科に移って、昭和一八年一〇月まで予科教授を務めた。東大での卒業論文が“A Study of Milton's Paradise Lost”であり、初めての著書が『抒情英詩集』（研究社、昭和二年）であることからもうかがえるように、心から英詩を愛好したロマンティストであり、学生からも同僚からも「為さん」の愛称で親しまれた。ヘロドトスの「歴史」やソクラテスの「対話編」やミルトンの *Samson Agonistes* を教えたが、いずれも学生を指名して訳読させることをせず、独りで講義をし、*Samson Agonistes* の場合には自分の訳をプリントし、それを学生に配布して講義したという。「プロンテの Jane Eyre を教わった。よく授業中に詩の話をされた。バーンズの “My heart's in the Highland” を歌って聞かしてくだらなうたことは今でも覚えていいる」と木下光雄氏が言い、「ヘロドトスやキプリングの詩を教わった。授業中に学生がテキストに飽きてきたところを見計らって、ポケットからバーンズの詩集を取り出し、“Loch Lomond” を読み上げ、そのあと節をつけて歌い出したりした」と横山健之輔氏が語っている。品川哲山氏（国立バイオニア会、昭和五年組）も「英語の、むしろ英詩のシンガー・モダンボーイ中村為治先生、あんな陽気な先生見たことがなかった。今どおしておられるや」と言うが、<sup>(11)</sup>現在もすこぶる壮健で、長野県安曇村乗鞍山麓の、みずから設計したという寓居で、スピノザの『倫理学』のラテン語原典から

の翻訳(同著は昭和五四年八月『羅和对訳スピノザ倫理学』として山本書店から発行された)とハーンズ詩集の改訳の仕事にいそしみながら、文字通り悠々自適の生活を送っている。著書には、前記『抒情英詩集』のあと、岩波文庫の翻訳書として、『ハーンズ詩集』(昭和三年)、『闘技者サムソン』(昭和九年)、『キップリング詩集』(昭和十一年)、『ジャングル・ブック』(昭和十二年)、『ハックルベリー・フィンの冒険』(上)(昭和十六年)、バーバンク『植物の育成』(上)(下) (Luther Burbank: How Plants Are Trained to Work for Men の訳) (昭和三〇〜三七年)や、『英米文学評伝』32、ハーンズ『(研究社、昭和九年)がある。

ウィア・レッドマン (Herbert Vere Redman) (一九〇一〜一九七五)はロンドンに生まれ、ロンドン大学を卒業し、パリのソルボンヌ大学に留学したのち、ロンドン語学校で英語とフランス語を教えていたが、昭和二年四月に来日して東京商科大学の外国人教師となった。商大には昭和八年九月まで六年半在職しただけにすぎないが、二五歳から三二歳という正に青年期の情熱を予科および本科での英語および英文学の講義と学生の指導のために傾注した。東京商科大学本科の講義要領(昭和四〜七年度)には、レッドマン教師担当(毎週二時間選択)の講義題目が「彼のようになつていよう。昭和四年度、Selected literary sources of current English: The Bible, Shakespeare, Johnson, and Dickens. 昭和五年度、Current thought in England (current political thought; current thought in literature; current thought in economics) 昭和六年度、I. Current English thought on social problems (taking as a basis the book "Listening into England" by H. Vere Redman. Sansendo). II. Representative studies of English literary background (The Bible, Shakespeare, and Dickens). 昭和七年度、I. The evolution of English political thought from 1811 to the present day. II.

## The post-war English novel.

レッドマンが昭和二年に商大に就任するとほとんど同時に、英語教授研究所に関係し、かねて文部省語学教育顧問として来日し、同研究所の所長の任にあったハロルド・パーマーと協力し、日本における英語教授法の改善に努めた。この分野での著述に、パーマーとの共著 *The Language-Teaching Business* (ロンドン、ハラップ社、昭和九年) がある。

しかし、レッドマンのその後における活躍はジャーナリストおよび外交官としてのものである。昭和五年から一四年のあたりにかけて、*The Japan Advertisers, Contemporary Japan, Japan News-Week* などの編集にたずさわり、また盛んに欧米の新聞雑誌類に寄稿して、日米親善の論調を打ち出した。昭和十一年には日本アジア協会の顧問となり、のち三六年には、同協会の会長に就任した。昭和一四年には英国大使館付き英国情報省東京出張所次長となり、二一年の太平洋戦争終了後には、英国大使館広報部長、日米協会副議長・同副会長を歴任した。三六年、停年によって英国大使館を退官し、帰英したが、その年に多年にわたって日英親善に尽くした功勞により、エリザベス女王からナイト爵を授与されている。三七年からは夫人の郷里である南フランスのヴォークリュエーズに隠居したが、なお *The Asahi Evening News* や *The Japan Times* に寄稿を続け、五〇年一月二六日、七三歳で逝去した。

レッドマンは、わずか六年余りであったが、一橋の英語教師として送った青春時代をあととまで懐しみ、一橋に深い愛情を抱き続けていた。昭和三六年の帰国に際し、浄財を日英協会に寄託したが、日英協会では寄託者の意向を汲み、それに会員からの寄付を加えて、一橋大学レッドマン賞基金を設け、一橋大学生の英語力増進に

資せしめることとした。このレッドマン賞は、昭和三八年から五二年まで、一橋大学前期教務委員会および英国文化振興会の審査のもとに、毎年前期学生から募集した英語論文の入選作一点への賞金に当てられた。一橋英語一〇〇年史のひと齣として、この商大時代における英国人教師の余薫を書き留めておきたい。

新里文八郎（一八九〇～一九四六）は岩手県に生まれ、東京高等師範学校英語科および京都帝国大学文学部英文学科を卒業し、昭和三年三月に和歌山高商教授から東京商大子科教授に転任し、以後一七年間、昭和二〇年三月に東京産業大学を依頼免官になるまで、子科で英語の作品講読を教え、また斎藤勇講師による英文学講義のあとを受けて、昭和六年度から一三年度まで文科で英文学および英文学史の講義を担当した。純粹な文学者肌の学究であり、「非常に穏やかで超俗的な人」（西川正身氏談）であった。「井之頭公園の池の端に長いことじっと池の光景を見入りながらすわっており、ゴルフズワージーの作品に描写されているロンドンのハイド・パークのサーペンタイン池を思い浮かべて、文学的思索に耽っている、とても思わせるようなところがあった」という（山田和男氏談）。編著書に“De la Mare: Selected Poems”（研究社「現代英文学叢書」、昭和九年）、『デラメア』（研究社「英米文学評伝叢書」、昭和一〇年）などがある。昭和二六年三月二〇日急性肺炎を患って逝去した。享年五六であった。

米本新次（一八九九～）はカナダ二世として生まれ、米国ミシガン大学およびワシントン大学大学院で修士し、昭和四年五月、高松高商教授から東京商大専門部教授に転任し、昭和一〇年九月まで在職した。「英作文を教わった。カナダの本場仕込みのアメリカ英語を流暢に操って授業されたので、学生にはわかりにくかった」と渡辺均氏が語っている。著書に『英文警句俚語集』（青雲堂、昭和一〇年）その他がある。商大退官後は、実業界

にはいり、戦後は東洋セールズ株式会社を設立し、その社長となり、その後昭和四九年までは日本精工株式会社顧問の任に当たった。

堀潮（一八九二—一九六六）は熊本県出身で、東京高等商業学校専攻部を大正九年に修了し、昭和六年五月から東京商科大学の教授となり、昭和三年三月に停年退官するまで在職した。専門の法理学・社会経済学を講じることかわら、英語の原書講読を担当した。その間、学生主事・予科寄宿寮寮監・予科長・総務部長・厚生補導部長を歴任して、学生の教育補導に尽くすところが大きかった。大学が新制化したのちも数年間、イギリス産業革命史などの文献を前期の学生に講読していた。

英 N・S・スミス (Neil Skene Smith) (一九〇一—?) は英国人でロンドン経済専門学校を卒業して商学士の学位を得たのち、同校商科助手を務め、またロンドン大学商学士通信教授部で教えたことのある経済学者である。東京商科大学に昭和六年九月から一二年三月まで外国人教師として在職し、商業学を担当して、本科と専門部に商業経済英語・貿易実務・西洋経済事情の講義を行なった。絶えず謹厳かつ寛容な態度で指導に当たり、学生に敬愛された。

トマス・フォーセット (Thomas Frederick Fawcette) (一九〇〇—?) は米国人でスタンフォード大学を卒業した。昭和七年四月に福岡高校から東京商大に転任し、昭和一三年三月まで本学の外国人教師を務めた。予科と専門部で英語を教えたほか、本科で商業英語・英文商業通信の講義を担当した。当時本学には数名の英米人の教師がいたうち、「英語劇・英語スピーチの指導は、フォーセット先生が一人で当たられていたように記憶していると渡辺均氏が「フォーセット先生」(『八紋—友情四五年の歩み』八紋会、昭和五〇年)で述べている。牧

一、ロレンス・フォーセット (Lawrence Faucett) (オックスフォード大学出身の英国人で、当時ハロルド・パーマーとともに文部省顧問であった) との共著『英語文法作文辞典』のことは既に触れた。商大退職後は、婦米して、スタンフォード大学大学院に入学し直して修士および博士課程を修了し、その後カリフォルニア州ヴァイセーリアで教育指導主事などを務めた。

P・A・V・ラッソー (Peter Anthony Varguez Russo) (一九〇八は) イギリスに生まれ、オーストラリアのメルボルン大学を卒業し、昭和八年八月に東京商科大学外国人講師に、翌九年四月に同じく外国人教師となり、太平洋戦争の始まる昭和一六年の三月まで在職した。予科で会話や講読を教え、また本科ではイタリア語の授業を開講したこともある。予科で教えていたラッソー先生のことを「ハンサムで垢抜けがしていた。ロバート・リンドのエッセイを教わった」と横山健之輔氏が語っている。

西川正身(一九〇四〜) 東京麴町に生まれ、東京大学文学部英文学科を卒業し、府立四中の教諭をしたのち、昭和九年三月に東京商科大学予科講師となり、翌一〇年七月から予科教授に任ぜられ、二六年四月に東大教授に転出してゐる。その後四〇年三月に東大を定年退官し、なお今日に至るまで日本におけるアメリカ文学界の重鎮としての地位を保持し続けていることは周知の事実である。このような学究経歴の当初にあつて、アメリカ文学の研究教育にとって条件に恵まれなかつた太平洋戦争前から、戦中・戦後にわたる時期を商大の教官として過ごし、商大の社会科学の学問風土を切磋研学の糧として、アメリカ文学という当時としては新しい分野の道を切り開いた体験は、西川教授が五一年一月から四月にかけて『英語青年』(第二二二卷一〇号〜第二二二卷一号) に発表した「日本のアメリカ文学研究草創期―ある同時代人の記録」中に語られている。そこには、斎藤勇講

師、新里文八郎教授のあとを継いで、昭和一四年度から本科で文学の講義を担当することになり、二年目の一五年四月からは、主に社会的背景のもとにアメリカ文学史の講義を行なったこと、ピュアリタニズムの文献研究に取り組み、商大の図書館から *Original Narratives of Early American Histories* を一冊ずつ借り出して読んだこと、フランクリンの研究に移って、A・H・スミス編 *The Writings of Benjamin Franklin* をこれまた商大の図書館に発見し、それによってフランクリンの全著作に目を通したこと、高島善哉教授その他の諸教官と折に触れて話し合い、物事を社会科学的に見る目を養ったことなどが述べられている。

なお、西川教授の商大時代の著書に、昭和二二年発行の『アメリカ文学ノート』（文化書院）と『フランクリン自叙伝』（研究社）があるが、ともにわが国におけるアメリカ文学研究史上で高く評価されている業績である。<sup>(12)</sup>

ジョン・ブリンクリー (John Ronald Brinkley) (一八八七～一九六四) は、幕末期以来日本に在住した親日英人フランシス・ブリンクリー (Francis Brinkley) (一八四一～一九二二) の子として、東京芝高輪に生まれ、ロンドン大学で歴史学を専攻したのち、成蹊高校その他で英語を教えていたが、昭和一〇年三月、牧一教授の紹介により東京商科大学専門部の外国人講師に就任し、翌一一年四月に同じく外国人教師となつて、太平洋戦争開始の翌年昭和一七年の三月、最後の交換船で帰英させられる直前まで本学に勤務していた。当時すでに仏教研究家として知られ、昭和一四年のころには国際仏教協会発行の『英文仏教百科大辞典』の編纂に従事していた。終戦後再び来日して、立正大学その他に出講して英語英文学を教えた。天台宗から権僧正の僧位を贈られ、昭和三九年八月二一日に他界したが、同日僧正を贈位された。歯切れのよいイギリス英語を話したが、同時に訛のない正しい日本語を身につけており、いい加減な日本語を話す学生には「英語を覚える前にまず日本語からやり直せ」

一般教育

と戒めたといふ。<sup>(13)</sup>

C・N・スピックス (Charles Nelson Spinks) は米国人で、スタンフォード大学法科を卒業し、Ph. D. の学位を取得した。昭和十一年四月から同一六年三月まで東京商科大学予科で英会話を教え、本科では米國政治史を講じた。「いかにも Yankeeらしく、無邪気で、学生に親しみやすい感じを与えていた」と横山健之輔氏が語っている。昭和十四年以後には、ウィア・レッドマンのあとを継いで、日本アジア協会の会員として、Japan News-Week の編集に当たり、日米親善、反ナチスの論調を張った。太平洋戦争の開始とともに帰米したが、その後もアメリカの大学に教授として務めたといふ。

以上のほか、この時期に五年未満の短期間在任した外国人教師または講師には、つぎの人がいる。パーシー・ホワイティング (Percy Whiting) (米国人、大正八年一〇月〜同一〇年三月講師、商業英語担当)、W・M・ビカトン (William Maxwell Bickerton) (オーストラリア生まれ英人、大正一三年九月〜昭和四年三月講師のち教師)、レイモンド・バンタック (Raymond R. M. Bantock) (英国人、大正一三年九月〜昭和二年三月専門部講師)、J・T・リー (Guy Travers Lee) (英国人、大正一四年四月〜昭和二年八月予科講師)、J・O・クラーク (John Owen Clark) (米国人、ペンシルヴェイニア大学卒業、昭和二年一〇月〜同四年四月予科講師)、G・S・ケアニー (George Sausmeier Carey) (英国人、昭和三年七月〜同七年三月専門部講師)、F・E・ファーンシンジャー (Frank Edwin Firminger) (英国人、昭和一二年四月〜同一四年五月教師、本科では英文商業通信を担当)、M・B・スレッジジャー (Maurice Bernard Thresher) (英国人、昭和一二年九月〜同一五年一月講師、本科では商業英語・貿易実務・西洋経済事情を担当)、J・W・レウォーン (John Willmer Lewarn)

語

(英国人、昭和一三年四月〜同一六年三月講師)、『ジャムソン (Arthur Barlay Jamieson) (英国人、昭和一四年六月〜同一六年三月講師、英語・英文商業通信担当)』、『A・W・マコイ (Angus Weldon McCoy) (一九〇六〜?) (米国人、イリノイ州ユールスカ大学卒業、ウィスコンシン大学大学院修了、昭和一六年四月〜同一七年三月予科講師)』、『W・B・メイソン (William Benjamin Mason) (一八七八〜?) (東京生まれ英人、昭和一六年四月〜同一七年三月専門部講師)』、『G・G・グレイナム (Gordon Grant Graham) (英国人、昭和一六年四月〜同一七年三月専門部講師)』、『G・P・ブルア (G. Percy Bloor) (一八八六〜?) (英国人、ロンドン大学クラークカレッジ卒業、昭和一六年四月〜同一七年三月予科講師)』。

英

- (1) 『英語青年』第三八卷一、二号、大正七年四月一日号、「片々録」。
- (2) 『国立・あの頃』三〇―三二頁。
- (3) 「一橋の英語」『如水会々報』昭和五〇年七月号。
- (4) 池田哲郎『日本英学風土記』五六二頁。
- (5) 「あの頃のこと」『一橋論叢』昭和四四年一月号。
- (6) 上田辰之助「長岡先生」『英語青年』第六三卷一〇号、昭和五年八月一五号。
- (7) 『国立・あの頃』二〇四頁。
- (8) 『国立・あの頃』二四一頁。
- (9) 宮田幸一『実践英語教育法』(大修館、昭和四二年)七八―九頁。
- (10) 『英語青年』第八一巻一、二号、昭和一四年四月一日号。
- (11) 『国立・あの頃』二八四頁。
- (12) 『日本の英語一〇〇年、昭和編』の中の斎藤光「アメリカ文学」(二〇一頁以下) および大橋健三郎「アメリカ文学

研究方法の問題」(一二五頁以下)を参照。

(13) 手塚竜磨『英学史の周辺』(吾妻書房、昭和四三年)二三六頁。

#### 四 第四期、一橋大学時代(昭和二四年～同五〇年)

##### 一、一般情況

昭和二四年五月に新制大学が発足し、本学も一橋大学と改称されるようになり、商学部・経済学部・法学社会学部(昭和二六年三月に分離されて、法学部・社会学部)が設置され、各学部の教育課程は、一般教育科目・外国語科目・保健体育科目を主とする初めの二年間すなわち前期と、専門科目を主とするあとの二年間すなわち後期とに分けられ、前期の教育が小平で、後期の教育が国立で行なわれることとなった。外国語科目としての英語の授業の大部分は前期で行なわれたが、三九年度までは、一・二年とも三座(六単位)履習の必須科目であったものが、四〇年度からは、二年が二座(六単位)履習の選択必須科目に変更され、さらに四九年度から、一年二座(四単位)・二年二座(四単位)で、そのうち一年の一座を必須とするほかは、他は選択必修制と改正された。この選択必修のクラスを精読クラスと講読クラスの二種類に分け、その内容も、小説・物語類と論説・評論類に分類し、ほかに文法・作文・会話の部門を設け、英語教育の教養上並びに実用上の目的達成を目指して、学生の自主的勉強意欲に対応しうるように、有機的多様化を図って、今日に至っている。同時に、英語とドイツ語・フランス語・ロシア語・中国語等と対等な外国語科目とする位置づけが、いっそう顕在化されるようになった。昭和三五年に聴覚器材による音声言語の教育施設としての語学ラボラトリーが発足したことも、その方向に沿うた

外国語教育の充実が具現化したものと見られよう。

上記の外国語科目としての授業のほかに、英語教官の担当するものに、一般教育科目としての英米文学、語学演習があり、さらに後期においては、共通科目としての英語、英語英米文学演習、社会学部の専門科目としての英文学講義および原典講読、教職課程科目としての英語科教育法などがある。それに加えて、新たに昭和四三年度からは、後期一般教育科目が設けられ、そのうち英語教官は英米文化を担当するようになった。

つぎに、スタッフの動静に眼を転じよう。昭和二四年に旧制の東京商科大学が新制の一橋大学に切り換えられたところから、山田和男教授が、四四年三月の定年退官に先立つ数年前の時期まで英語科主任の責を担って、一橋英語教育の新体制の樹立に尽力したことが特筆されるべきであろう。その間、スタッフの更新と拡充に、従来よりもいっそう公正を期した方途を採り入れ、学閥や知遇関係に捉われることのない人事選考法を確立した。

一方、昭和三七年から、学内に語学文学担当教官の共同研究室として一橋大学語学研究室が開設され、外国語教官がその研究と教育の主体的条件を従来よりもいっそう整備拡充しうる態勢となった。

## 二、教授陣概要

この時期における英語担当教官については、商大時代の後期から引き続き在職していた山田和男・府川哲雄・佐々木高政・岩田一男・海老池俊治・青木雄造の六教授に関して比較的詳しく述べ、その後、新制期にはいつから就任した教官に関しては簡単に記し、最後に英米出身の外国人教師および講師を一括して紹介し、本節の記述を終えることとしたい。

山田和男(一九〇六—一九八五)は静岡市に生まれ、東京外国語学校英語部を卒業し、昭和一〇年九月に米沢高

等工業学校から東京商科大学予科講師に赴任した。それまで予科で英語を教えていた阿久津謙二教授が予科主事になって、担当授業時間数を減少する必要ができて、それを埋めるための就任であったが、その後も阿久津教授からは公的な支援を受けて、一三年三月からは専門部教授となり、二四年四月、新制一橋大学の商学部配属教授となった。新制大学発足の当初には、高橋泰蔵教授・久武雅夫教授らとともに大学制度改革の重責を全うした。その後は英語科の職責のないし実質上の主任として、スタッフの整備補充から授業体制の充実強化に至るまで同僚後輩の指導に尽くすと同時に、その卓抜して精練された英語力をもって学生の語学教育の任に率先して当たった。

また昭和三五年に発足した視聴覚教室(のちの語学ラボラトリー)の運営委員長を四三年三月まで務め、本学における新時代に即応した外国語教育の向上に尽瘁した。日本の英語英米文学界ないし英語教育界では、特に英作文の権威として知られているが、訳著書に、『Root-Garden by Kunio Kishida and Other Contemporary One-Act Plays (岸田国士『屋上庭園』その他の英訳)(四条書房、昭和一五年)』、『英作文研究—方法と実践—』(文建書房、昭和二七年)、『英語こぼれ話』(文建書房、昭和二八年)、『開明英文文法—表現の科学—』(Lin Yutang: Kaiming English Grammar の訳)(文建書房、昭和三五年)、『新クラウン和英辞典』(三省堂、昭和三六年、第三版四七年)その他がある。四四年三月に定年退官し、その後五六年三月まで千葉商科大学教授を務めた。

府川哲雄(一八九五—一九六八)は兵庫県出身で、大正七年に東京高商を卒業したのち、京都帝大英文科に入學し、それを卒業して和歌山高商の教授となったが、昭和一三年三月に東京商科大学予科教授となり、その後一橋大学時代も英語を教え続け、二四年三月に定年退職するまで本学に留まった。生きわめて温良誠実で、特にブラウニング・ワーズワースなどの英詩の研究にすぐれていた。著書『英詩研究』(健文社、昭和一七年)は学界

に高く評価された業績である。本学退官後は、国立音楽大学や共立女子大学に出講していたが、昭和四三年七月一七日歿した。

佐々木高政（一九一四～）は千葉県に生まれ、東京高等師範学校文科第三部を卒業し、横浜専門学校や慶応大学に教えていたが、昭和一六年四月、東京商科大学専門部の講師として就任し、一橋大学では初め助教として務め、三五年七月に教授に昇任して、五二年四月に定年退職するまで、丸三六年間本学で英語を教えた。型に扱われず弧高を保って学生の指導を楽しむといった風格があった。特に俳句の英訳など英作文にすぐれ、著書に『和文英訳の修業』（文建書房、昭和二七年）、翻訳 Akutagawa's The Three Treasures（北星堂、昭和一九年、再版二六年）その他がある。

岩田一男（一九一〇～一九七七）は神奈川県に生まれ、東京外国語学校英語部文科を卒業し、高検に合格して、小樽高商の教授を務めたのち、昭和二〇年一月に東京産業大学の講師に就任し、二二年二月に予科教授となり、一橋大学時代には三四年七月に助教から教授に昇任し、四六年三月に依願退職をした。終始闊達で正確な英語力をもって懇切な指導に当たり、学生に親しまれた。また、多年にわたって一橋国際部の顧問教官を務めた。編著書訳書が多く、翻訳、イードス・ウォートン『三色の雪』（大学書林、昭和二四年）、『英語に強くなる本』（光文社、昭和三六年）、『スペイン武勇僧伝』（De Quincey: The Spanish Military Num の翻訳）（評論社、昭和四〇年）、『ローマ帝国』（翻訳「アシモフ選集」歴史編四）（共立出版、昭和四四年）、『英単語の歴史』（同歴史編一〇）（共立出版、昭和四五年）その他がある。四二年以降、比較文学国際会議や国際ペンクラブ会議の日本代表会員として活躍した。昭和五二年二月七日肝硬変で歿した。

海老池俊治（一九一〇—一九六八）は京都市に生まれ、東京大学文学部英文学科およびその修士課程を斎藤勇博士の指導のもとに修学し、昭和二十二年三月に東京産業大学専門部講師、同年九月に予科講師となった。大学が新制化してからは、社会学部に所属し、三二年七月に助教から教授に昇進した。このように前期で英語の授業を行なうとともに、社会学部の講座教官として文芸社会学の一講座である英文学の講義を担当したのであるが、この点は本学の語学教官として異例的なことである。この英文学講座は、昭和二六年二月に西川正身教授が辞任したあとを継いで、社会学部において担当することとなったのであり、歴史的には、大正一五年に神田乃武教授記念基金によって創始され、海老池教授の恩師斎藤勇博士により商大本科で始められた英文学講義の伝統を継承したものと見える。海老池教授の英文学者としての研究傾向ないしその学風をうかがい知るため、つぎに社会学部において十数年間に開講した文芸社会学の講義題目を列記してみよう。「英国一九世紀文学と社会」「明治文学と英文学」「二〇世紀の英国小説」「一九世紀の英国小説」「明治における英文学―比較文学的に―」「英文学の種々相―文学と歴史―」「明治文学と英文学―比較文学的考証―」「イギリス一八、九世紀の文学現象を社会史的関心をもって理解する試み」

著書には、『第一八世紀英国小説研究』（研究社、昭和二五年）、『ディキンズ』（研究社、昭和三〇年）、『一九世紀の小説』（研究社、昭和三一年）、『ヴィクトリア時代の小説』（南雲堂、昭和三三年）、『ジェイン・オースティン論考』（研究社、昭和三七年）、『若き日の芸術家の肖像』（James Joyce: A Portrait of the Artist as a Young Man の翻訳）（筑摩書房、昭和四二年）、『明治文学と英文学』（明治書院、昭和四三年）その他がある。性率直明朗で、しかも恬淡として、常に文学青年的な若々しさを堪え、僚友後輩に親しまれていたが、不幸に

も胃癌の冒すところとなり、昭和四三年七月三日、満五七歳にも満たぬ若さで世を去った。遺志により、その蔵書、洋書一七九〇冊和書六〇二冊が一橋大学に寄贈され、現在、海老池文庫として小平分館に所蔵されている。

青木雄造（一九一七～一九八二）は東京出身で、東京都大学文学部英文学科を卒業し、昭和二年四月に東京産業大学予科講師に嘱託され、翌二年七月に東京商科大学予科教授となったが、新制度のもとでは助教教授として二八年三月まで務め、同年四月に東京大学文学部へ転出した。当時から誠実に英語の授業を行なうかたわら、グレアム・グリーンなどを中心とした現代英文学の研究に励んでいた。その後昭和四〇年東大教授に昇任し、学科主任などを務めるかたわら、文部省大学設置審議専門委員や日本英文学会会長を歴任した。五二年三月東大を停年退官した後は明治学院大学で英文学講座を担当した。

つぎに、一橋大学時代にはいつてから就任した英語教官には、つぎのものがいる。山川喜久男（一九一九～）（青森市出身、東京外国語学校英語部文科卒業、昭和二五年三月一橋大学講師に就任、二七年一二月助教、三九年四月教授に昇任、英語学専攻、特に英語の史的統語法を研究課題とする）、菊池亘（一九二一～）（岩手県盛岡市出身、東京大学文学部英文学科卒業、昭和二五年四月東京商科大学付属専門部助教に就任、二六年四月一橋大学講師となり、二九年四月助教、四〇年一二月教授に昇任、英文学専攻、特にキーツおよびその周辺、シェイクスピア、主としてその「ソネット集」を研究課題とする）、富原芳彰（一九二一～）（静岡県出身、東京文理科大学英文科卒業、昭和二六年四月一橋大学講師に就任、二六年三月助教、四〇年一二月教授に昇任、五〇年四月筑波大学文芸言語学系に配置替えとなる。英文学、特にシェイクスピアを専攻）、増谷外世嗣（一九二四～一九八四）（滋賀県出身、東京大学文学部英文学科卒業、同修士課程終了、昭和三一年四月一橋大学講師に就任。

三五年七月助教、四一年一月教授に昇任、英文学専攻、特にW・B・イエーツ、W・H・オーデンの詩論および文芸評論を研究課題とする)、宮下忠二(一九二六) (長野県上田市出身、東京文理科大学英文学科卒業、同研究科修了、昭和三二年四月一橋大学講師に就任、三〇年四月助教、四五年五月教授に昇任、英文学専攻、特にグレイ、コリンズからシェリ、キーツに至るローマン派詩人および二〇世紀小説を研究課題とする)、齋藤忠利(一九三〇) (千葉県出身、東京大学文学部英文学科卒業、同修士課程修了、昭和三六年四月一橋大学講師に就任、四〇年四月助教、四七年七月教授に昇任、アメリカ文学専攻、主として現代アメリカ小説を研究課題とする)、山田泰司(一九三〇) (埼玉県所沢市出身、東京文理科大学英文学科卒業、昭和三七年一月一橋大学講師に就任、四〇年四月助教、四六年八月教授に昇任、英語英文学専攻、特に英語文体論および一九世紀英詩を研究課題とする)、山本和平(一九二九) (東京都出身、東京外国語大学英米語学科卒業、東京大学修士課程修了、昭和三八年四月一橋大学講師に就任、四〇年十二月助教、四七年七月教授に昇任、英文学専攻、特にデ・フォー、スウィフト等一八世紀イギリス小説を研究課題とする)、河村錠一郎(一九三六) (東京都出身、東京大学文学部英文学科卒業、同修士課程修了、同博士課程単位修得、昭和四〇年四月一橋大学講師に就任、四四年二月助教、五四年四月教授に昇任、英文学専攻、特に文学におけるマニエリスムおよびルネサンス様式を研究課題とする)、平野信行(一九三六) (東京都出身、東京大学文学部英文学科卒業、同修士課程修了、昭和四一年四月一橋大学講師に就任、四五年五月助教、五四年四月教授に昇任、アメリカ文学専攻、特にユダヤ人問題を中心とする現代アメリカ文学と人種問題の関係を研究課題とする)。

以上のほか、この時代に短期間在職した英語教官に、下村誠二(昭和三一年八月〜三四年三月講師、のち東京

大学教養学部へ転出、英語学専攻)、小野茂(昭和三四年四月～三七年三月講師、のち東京都立大学人文学部へ転出、英語学専攻)、長谷川欣佑(昭和三七年七月～四〇年三月講師、のち東京大学文学部へ転出、英語学専攻)がいる。

語

種々の事情によることではあるが、昭和二四年度から五〇年度までの時期において、英米出身の外国人教師または講師で、旧制度特に太平洋戦争以前における場合とは著しく異なり、本学の英語教育のために長年月にわたって在職し続ける人が少なくなっている。以下に、それを列挙する。L・E・ホームグレン(Laton E. Holmgren)(一九一五～)(米国人、ミネソタ大学卒業、ドルー大学院修了、昭和二五年四月～二七年三月教師)、マイケル・サピア(Michael Sapir)(米国人、昭和二五年一月～二六年三月教師)、スザンナ・ライカー(Susannah Riker)(米国人、昭和二六年四月～二七年三月講師)、M・A・シャーマン(Marston A. Sherman)(米国人、昭和二七年一月～二八年七月教師)、B・A・ビュカナン(Brian Angus Buchanan)(一九〇〇～一九七六)(スコットランド生まれ英国人、昭和二七年一月～三二年三月教師、同年四月～五月講師)、L・E・ブルワール(Lucie Elizabeth Brewer)(英国人、昭和三二年五月～三三年三月講師)、I・C・ニール(Ivan Crosland Bell)(英国人、昭和三三年四月～三四年九月教師)、J・M・アラダイス(Joseph McNicol Allerdice)(米国人、昭和三四年一月～三七年三月教師)、J・B・サザランド(Thankful Bailey Southerland)(米国人、昭和三八年一月～四一年一月教師)、カロリン・ベンボウ(Carolyn Benbow)(米国人、昭和四一年四月～四二年三月教師)、C・H・N・ルーカス(Christopher Hugh de Noutville Lucas)(英国人、昭和四一年一月～四二年三月教師)、H・B・ゲスト(Henry Bayly Guest)(英国人、昭和四一年一月～四二年三月講師)、A・

英

A・シルヴェストリ (Albert A. Silvestri) (一九二九～) 米国人、ニューヨーク州ベース大学卒業、サンフランシスコ州立大学修士課程修了、昭和四二年四月～四八年三月教師)、『E・R・ベック (Eleanor R. Beck) (米国人、昭和四二年四月～同九月講師)、『R・J・クロー (Robert John Crow) (一九一五～) (スコットランド生まれ英人、エディンバラ大学卒業、昭和四二年一〇月～四八年三月講師、同年四月以降教師)、『J・J・コーザ (Joseph Jan Kozar) (米国人、昭和四八年四月～四九年三月講師)。

あとがき

一橋大学一〇〇年の学問史の一環として英語部門を扱うに当たり、それを敢えて「一橋英語」と銘打ったことには、本学において創立以来外国語特に英語の教育研修が伝統的に重視され、誇りとするに足る成果を挙げた歴史的事情や、一橋の学問的特徴の変遷において、ないしはわが国における英学の発達史において占める位置の重さに鑑み、その特質を端的に表明したいという意図から出たことである。そういう筆者の気負いにもかかわらず、記述し終えた結果が十分にその名に耐えうるだけの実を表わすことができたかどうか、願みて忸怩たるものを覚える。先人の築いた貴重な伝統は新情勢に即応して適宜な変遷を被りながらも、なお継承されて発展してゆくことであろう。背後にそのような伝統を担っているわれわれ、およびわれわれのあとに続くものたちの責務は重く、また大きいものと言わなければならない。